



鳥取県八頭郡郡家町

稻荷古墳群発掘調査報告書

—小学校の統合、その建設に伴う埋蔵文化財発掘調査—



写1. 古墳群北西上空より望む

1980. 9

郡家町教育委員会

稻荷古墳群発掘調査報告書

郡家町教育委員会

序

この稻荷古墳群発掘調査は、本町の小学校教育的一大改革といえる小学校統合校舎の建設に伴うもので、その予定地内にある埋蔵文化財（古墳）を記録保存のため、緊急に発掘調査をしたものです。

調査は、統合校舎の建築着工予定など、いろいろな制約のなかで精力的に行われ、遺構がかなり失われていたものも含めて、大小15基の古墳が群集的に存在していたことが確認記録され、所期の目的を達成することができました。

このたびの調査実施にあたり、御指導いただいた方々や、御協力くださいました関係各位に対し、本調査報告書の紙上をもって深く感謝と敬意を表するとともに、心からお礼申し上げます。

昭和55年9月

郡家町教育委員会

教育長 石 谷

取

例　　言

1. 本書は、郡家町統合小学校建設に伴う緊急調査を郡家町教育委員会が昭和54年7月2日から昭和55年3月1日にわたって実施した郡家町大字稻荷地内の古墳群調査報告書である。
2. 現地調査は、山形顕応が担当、県文化課森田純一、野田久男が指導、町教育委員会職員が補佐した。

本書の作成は、山形顕応が担当し、町教育委員会が編集した。

3. 現地での測量は、西日本建設コンサルタント（株）及び安藤博昭、遺構実測は山形顕応と安藤博昭があつた。
4. 航空写真的撮影は坂田亘、遺跡写真及び出土遺物写真は山形顕応があつた。
5. 報告書中の土色及び土器類色調は農林水産技術会議事務局監修の標準土色帳による。

調査団名簿

調査団長 石谷 収（町教育長）

調査主任 山形 順応

調査指導 森田 純一，野田 久男（県教育委員会文化課）

事務局 坂田 亘，丸山 勉（町教育委員会社会教育係）

調査補助員 安藤 博昭

作業員 岸本貞治，山根金藏，岸本順藏，西村留治，桑村邦春
西村甚太郎，岸本春枝，岸本せつ子，山根静子，岸本あき子
岸本みのを，富山量子，岡山令子，横山淑恵，松田ちよ子
古田澄恵，松本壽子，井上ます栄，松本サツ子，石田幸枝
今嶋美代子，横山千枝子，井上成子，奥平敏子，山内儀一郎
岩本柳藏，石田ふゆ，小山きよ，岩本その

目 次

第1章	発掘調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	2
第3章	調査の概要	4
1.	古墳の立地とその構成	4
2.	1号墳	9
3.	2号墳	11
4.	3号墳	14
5.	4号墳	15
6.	5号墳	16
7.	6号墳	18
8.	7号墳	20
9.	8号墳	23
10.	9号墳	25
11.	10号墳	26
12.	11号墳	27
13.	12号墳	30
14.	石群	32
15.	13号墳	33
16.	14号墳	36
17.	15号墳	38
18.	古墳一覧表	41
第4章	出土遺物	42
1.	出土遺物一覧表	42
2.	出土遺物実測図	46
3.	出土遺物写真	50
第5章	まとめ	53

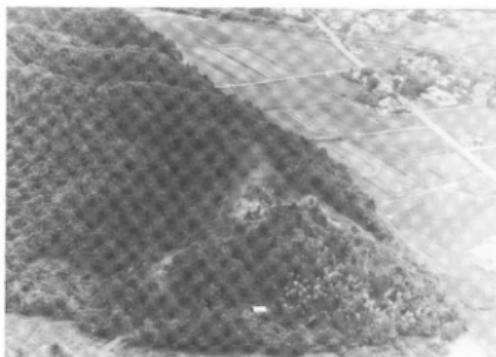
第1章 発掘調査に至る経過

郡家町では、小学校教育100年の大計を考え、昭和49年小学校統合審議委員会を設置するなどして、検討を重ねてきたが、いよいよ昭和56年4月に現在の6小学校を2校に統合し、新しい小学校を発足させることになった。

この校地の決定に当っては、種々の資料をもとに検討が加えられたが、このうちの1校の校地が、この郡家町大字稻荷地内に設定され、その用地取得が、昭和4年3月町企画開発課によって行われた。

用地取得後この地内の山林の山頂付近の松林の中に、いくつかの古墳が存在することが認められ、郡家町教育委員会では、関係諸機関と協議し、教育委員会が事業主体となり、事業費全額を単独町費をもって、昭和55年2月末日を目途に、緊急に発掘調査を行い、その記録を保存することになったものである。

ただし、この丘陵地一帯は、旧土地所有者の人が、全山を公園にする計画で開墾し、いろいろな花木を植えていた。このため、土地を町に売却すると同時に、その花木の移転のための搬出用道路が稜線に沿ってつけられ、造構が削平されていたものもあった。



写2. 古墳群 北西上空より望む

第2章 位置と環境

稻荷古墳群周辺の歴史的環境

稻荷古墳群は鳥取市南方約10kmの私都谷の入口に位置し、郡家町は因幡では鳥取市、気高町に次ぎ遺跡が多い所である。先土器時代の遺物は未確認であるが、縄文時代になると帝塚山大学により調査された西御門遺跡が知られており、後期の麻消繩文を施した土器や打製石斧等が出土している。しかし、石器として一般的な石鎌や石錐などは八頭郡では発見例が少なく、町内でも報告されていない。

稻作の普及した弥生時代になると遺跡が増加し、土師百井や上峰寺、花原地内で大型蛤刃石斧が、また上津黒では石庵丁が採集されている。稻荷に近い下坂字東梶平では、中期ないし後期前半に比定される外縁付鉢Ⅱ式に属する袈裟桜文銅鐸1口が発見されている。これは高44cm程の大きさで、昭和9年に重要美術品に指定されている。

弥生の終末から古墳時代前期にかけて、山路・花原・山田あたりの微高地に人々が住みついたと思われ多数の土器が出土したが、残念なことに調査がなされないまま樹園地造成が行われたので、豊穴住居跡などは検出されていない。町内には靈石山の南及び東斜面と私都谷の入口付近に古墳の密集地帯があるが、両者の古墳群のあり方は若干様相を異にしている。すなわち、靈石山山麓では前方後円墳を含まず横穴式石室墳を主体とし、中に福本4号墳など合計5基の線刻壁画古墳が混っている。これに対して私都谷では横穴式石室墳の占める比率は低く、前方後円墳・横穴が認められる。古墳時代の終りから私都谷で須恵器の生産が始まり、奈良時代末から平安時代にかけてこの地域は県下最大の窯業地帯として栄えた。北へ山ひとつ越えれば岡益の石堂や梶山古墳・因幡国府のある法美平野が開けている。

中世の遺跡も山路の墳墓・下峰寺経塚群・市場城・大坪城跡などいくつか知られており、稻荷古墳群周辺は狭いながら安定した平地をかかえた形勝の地であったといえよう。



写3. 古墳群 東北上空より望む

位置図



上図 鳥取県地図

下図 稲荷古墳群を中心とした
郡家町の一部



第1図 稲荷古墳群とその周辺

第3章 調査の概要

1. 古墳の立地とその構成

稻荷古墳のある丘陵の西方500mに国道29号線が走り、それを境に西から西南にかけては、西南5kmにある氷石山を頂点にする丘陵や尾根が一個の独立した丘陵地帯を形成している。

眼下1.2kmの平野部を過ぎた南側は、南東の猫山（536.9m）を頂点に山並みを東南東に伸ばして氷ノ山に繋っている。北から東へかけての丘陵は、国府町、鳥取市、郡家町と三市町にまたがっており、東北東3.5kmの宝山（294.6m）を頂点に丘陵や尾根が続いて扇ノ山へと繋っている。その三市町に跨った丘陵の一隅に稻荷古墳群を乗せた丘陵があり、近隣の丘陵山裾に古墳をみるとことができる。丘陵の向う側東北の山裾に、国府町岡益の石堂や梶山古墳が、北へ進むと笑道、三代寺を過ぎて国分寺が、鳥取市側へまわると、杉崎、津ノ井、生山、桂木、海藏寺に、大小の古墳群が連なって、この丘陵一帯が先史時代遺跡の大宝庫となっている。

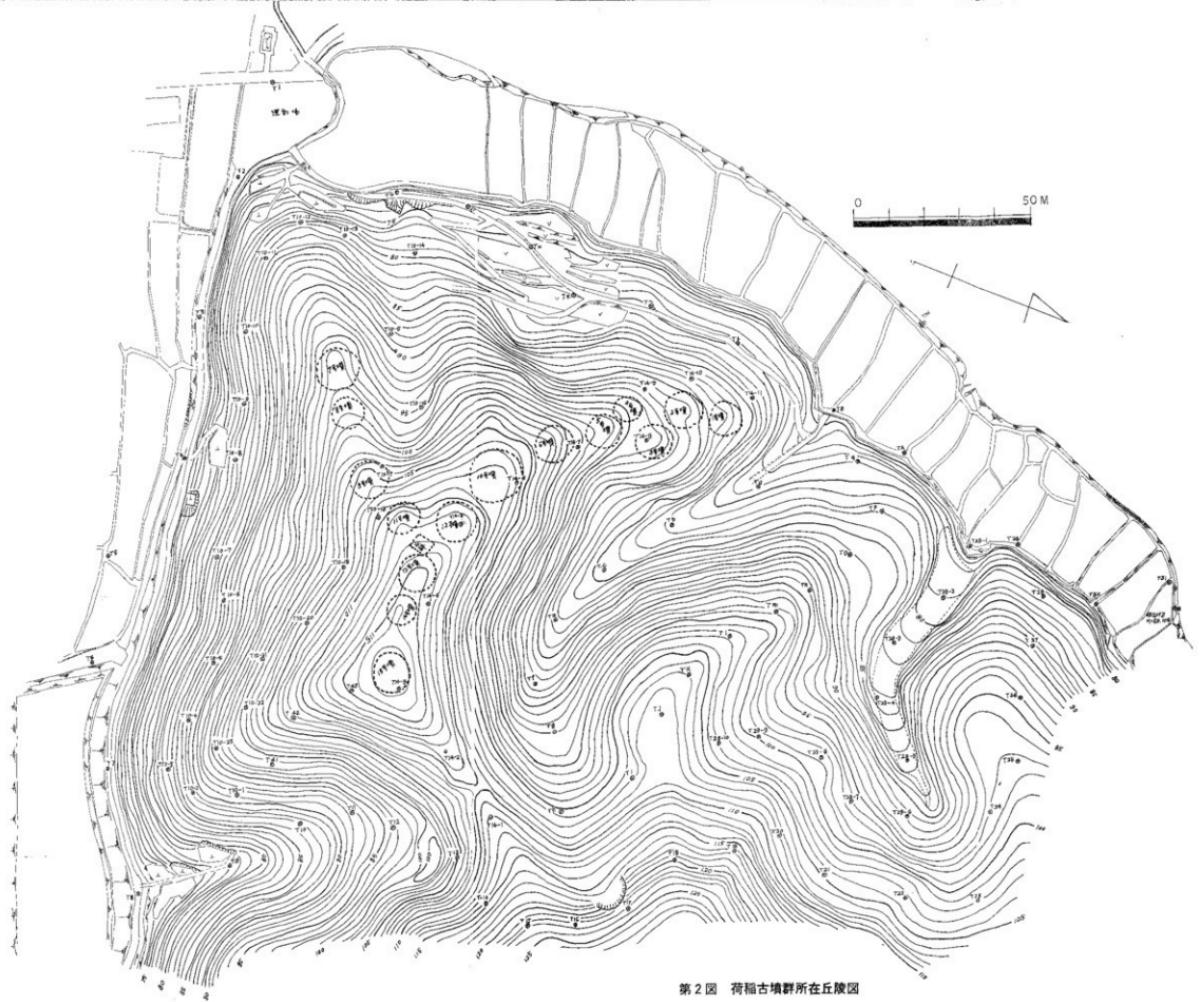
古墳群と呼ぶよりは群集墳と呼ぶ方が適しているこの稻荷古墳群は、眼下に現代でも「土師の郷」と呼ばれている稻荷穀倉地帯を見おろす丘陵尾根上に点在している。

河原町、船岡町、郡家町と続く広い平野が、鳥取市と接する堀越、稻荷で向きを東にとり、私都谷へと伸びている。その曲り角に群集墳のあるこの丘陵が、平野の北へ伸びるのを阻止して聳えているのである。それだけに丘陵からの眺望は郡家平野だけでなく船岡町、河原町までを垣間みることができる。眼下の稻荷、下坂の中間を流れる私都川、古くは「土師川」と呼ばれ源流は13km奥の姫路、明治にみられ「氷ノ山後山那岐山国定公園」の扇ノ山に求められる。

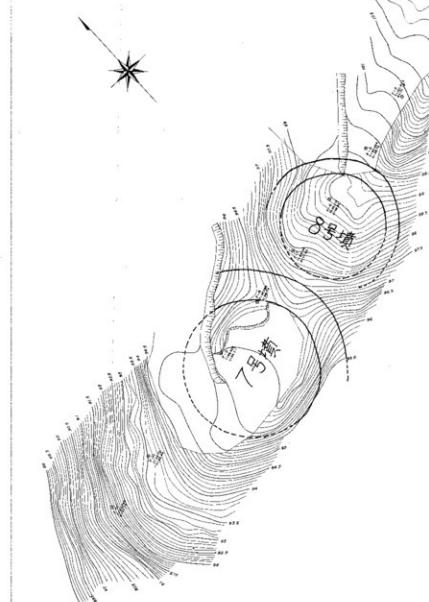
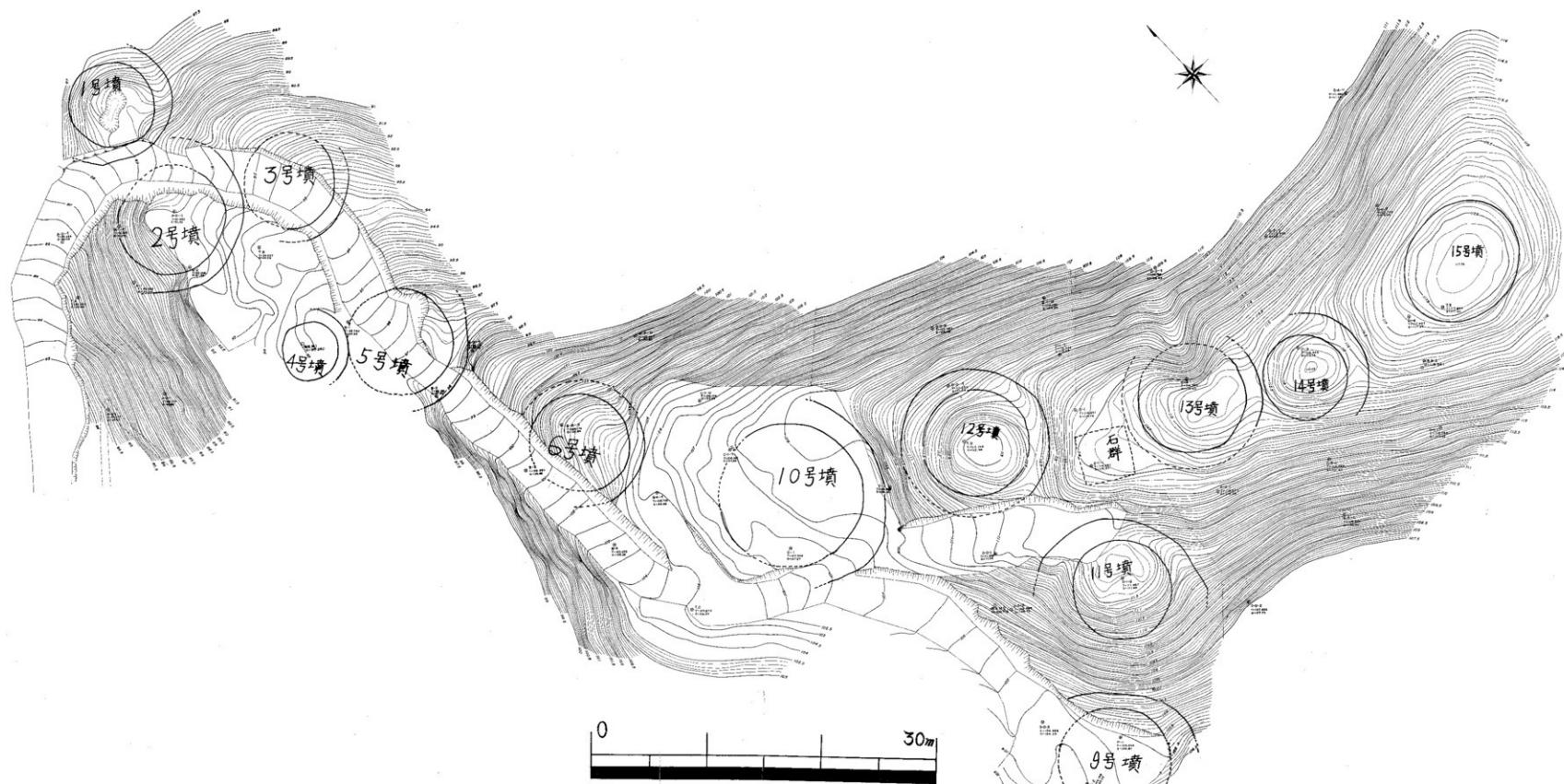
この古くは「土師川」と呼ばれた私都川が稻荷の集落を離れて下坂に向かおうとする所に、小さな祠があり、現在は賀茂神社に合祀された「土師神社」の跡だと土地の人から聞く。

「土師の郷」「土師川」「土師神社」それ等を眼下にする丘陵上の群集墳、これら墳墓の主体者を土師一族に関係ありと考えることは餘目であろうか。

小学校建設用地として切り崩し埋め立てられる事になったこの丘陵上標高88mから117mの間に15基の円墳（墳丘径12mから4.6m）が6世紀初頭より百数10年に亘って營々と築造され、現在の稻荷古墳群が形成されたと考えられる。これら古墳群の中位に位置する見晴しの良い墳丘からは比較的古い土器片の出土がみられたが、墳丘の位置する高低関係からは時代の前後を決定する事がかりを見い出すことはできなかった。そこで調査順位により比較的低位にあるものより順次1号墳、2号墳とし15号墳まで調査の対象となった。13号墳西側墳丘裾より平坦にテラス状に伸びた部分があり、そこには45個の河原石が古くは何等かの形態をもたせて置かれた箇所があり、一応石群と呼ぶ事とした。これら15基の一連の古墳群は箱式石棺を有するものと埋葬施設を持たない土壙墓との二種に分類する事ができる。しかしこの一連の群集墳を離れれば、東方150m地点には横穴式石室を有すると思われる円墳があり、西方100m地点には横穴すらあったといわれる。



第2図 荷福古墳群所在丘陵図



第3図 古墳調査時測量図

2. 1号墳

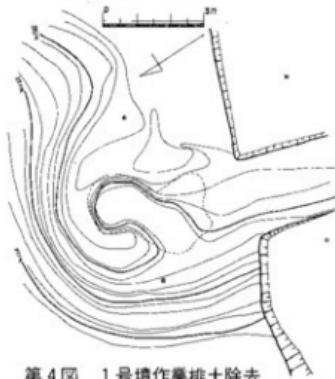
1号墳は東西に伸びる丘陵最西端の墳丘で南に2号墳と接している。この丘陵は現在雑木に覆われた部分、10年未満の松植林地帯、30年程度の松林地帯で形成され、10数年前まで果樹園として利用された場所もある。それに相当する墳丘は、2号墳、3号墳、4号墳、5号墳、7号墳、8号墳である。幸い1号墳は果樹栽培による削平は受けていなかった。雑木と松の半々利用の地らしい。この丘陵が学校建設用地に内定した時、植えられていた「つつじ」「もみじ」などの花木移植のための道路がつけられ、2号墳、3号墳の破壊された上が墳丘の外を覆い、南側の一部には幅3mの道路が乗っていた。覆われた土を取り除くと、墳丘中央部に長径2.5m短径1mの瓶型の盜掘穴があった。

盜掘穴は旧来盜掘穴のあった所を10年前後以前更に機械掘りされたらしく、深さ1m余もあり、雑木や枝が押し込まれ腐蝕していた。

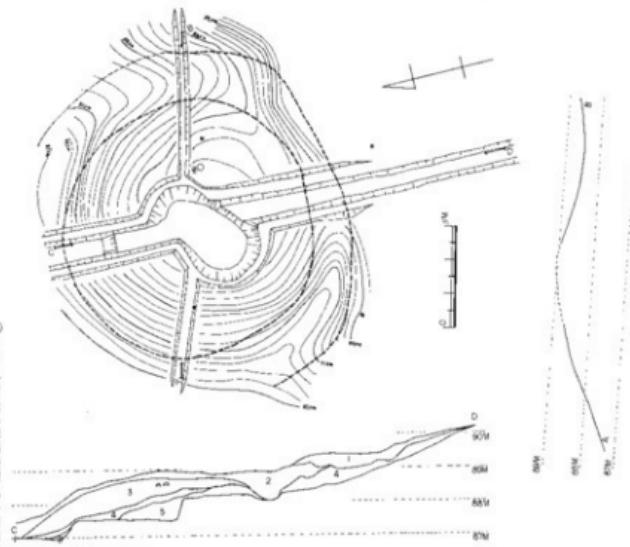
盜掘穴壁面よ

り埋葬施設の推察のため壁面を観察したが掘り込み、切り込み等の跡は見られなかった。厚さ6cm明褐色粘

③	④	⑤	⑥	⑦
5 Y R B 植 生 地 (舊 地 表 面)	2.5 Y R B 粘 土	2.5 Y R B 粘 土	5 Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土	5 Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土
Y R B 植 生 地 (舊 地 表 面)	Y R B 粘 土	Y R B 粘 土	Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土	Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土
Y R B 植 生 地 (舊 地 表 面)	Y R B 粘 土	Y R B 粘 土	Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土	Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土
Y R B 植 生 地 (舊 地 表 面)	Y R B 粘 土	Y R B 粘 土	Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土	Y R B 粘 土 及 び 新 い 塗 入 土



第4図 1号墳作業排土除去



第5図 1号墳表土除去

質富含腐植土の表
土の下は厚さ約50
cm明赤褐色角礫散
在粘質砂土の盛土。
その下は灰褐色厚
さ12cm粘質富含腐
植土の旧地表、そ
の下が橙色角礫散

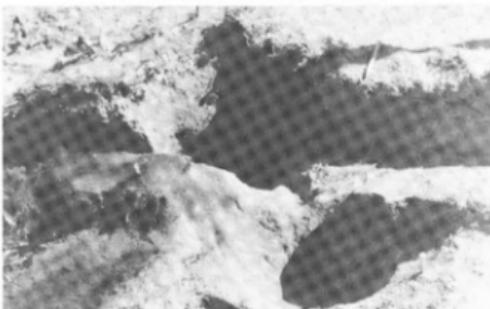
在粘質砂土となっていた。更によ
く観察すると灰褐色の旧地表面上
に同系統色だが、灰色の強い部分
が点々とあり、それは粒子も微細
で粘着性も強かった。又それが水
平に散在しているので、埋葬され
た跡かと考えたが、後で調査した
ところ範囲が狭いのと、副葬の蓋
杯から平面的に40cm以上、上下か
らは約30cm離れているので関連づ
けられなかった。

2号墳中央部より盗掘穴東側に
幅30cmのベルトを残し表土を剝ぐ、
南側溝部墳丘裾より土器片出土す
る。土器片の出土は蓋杯(副葬)を
除いて他には見られなかった。墳
丘径7.6m、高さ1.4m、東北東よ
り南を廻り西南西にちょうど半円
形に幅1.6mの溝が掘られ、盛土と
されていた。墳丘中心より60cm東
寄り表土より20cm下に一对の蓋杯
が10cmの間隔で南北に伏せて出土。
土色、土質共に土壤の形跡なし。

2号墳溝と思われるものとの切
り合いから1号墳は2号墳が築造
された後に築造されたと思われる。



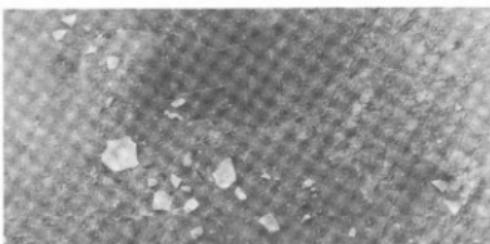
写4. 1号墳 南方2号墳上より望む



写5. 1号墳 西より望む 盗掘穴あり



写6. 1号墳 出土杯

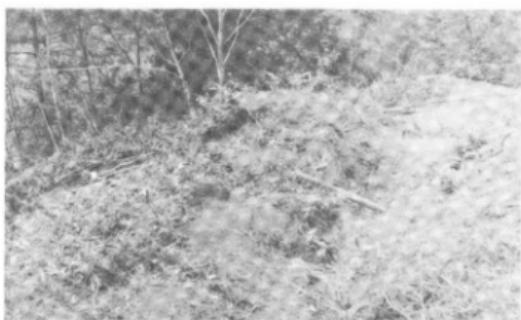


写7. 1号墳 南側溝中土器出土状況

3. 2号墳

2号墳は東西に伸びる丘陵尾根の最西端に位置し、北に1号墳、東に3号墳と接している。もと果樹園として利用された形跡があり、現在は雑木林となっている。3m幅の道は2号墳西側を右廻り、北側を少々削って1号墳との間を登り、東に直進して3号墳中心部、5号墳中心部をとおり、6号墳南側を削って登っている。この道を作る前には2号墳と1号墳の間で向きを南に右折して2号墳中心部までの東側を削り、3号墳裾を左廻りして4号墳との間を通り5号墳中心部へと右折していたらしい。2号墳東側は2号墳の破壊された土、3号墳の破壊された土が盛り上げられており所によると3m余に及んでいた。

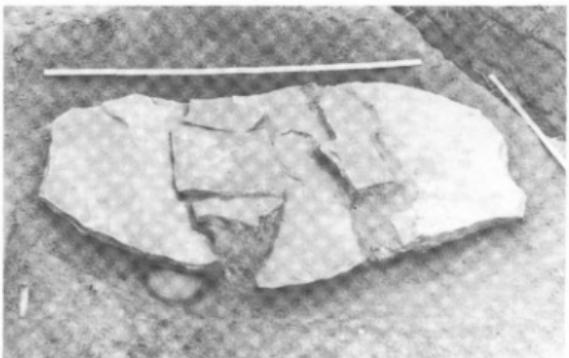
作業排土除去後、墳丘中心部を通り3号墳中心部へ向かう東西の幅1mのトレーニチを入れる。地表は果樹園時代に削平され、現地表を構成しているのは腐植土、流入土及び搅拌さ



写8. 2号墳 南より望む

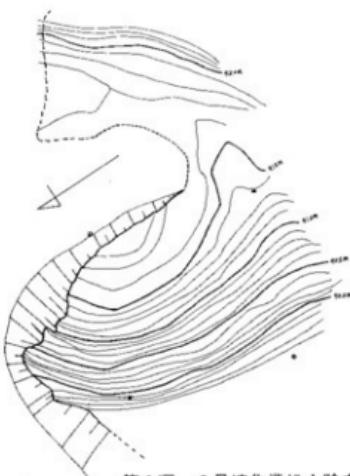


写9. 2号墳 西南より望む

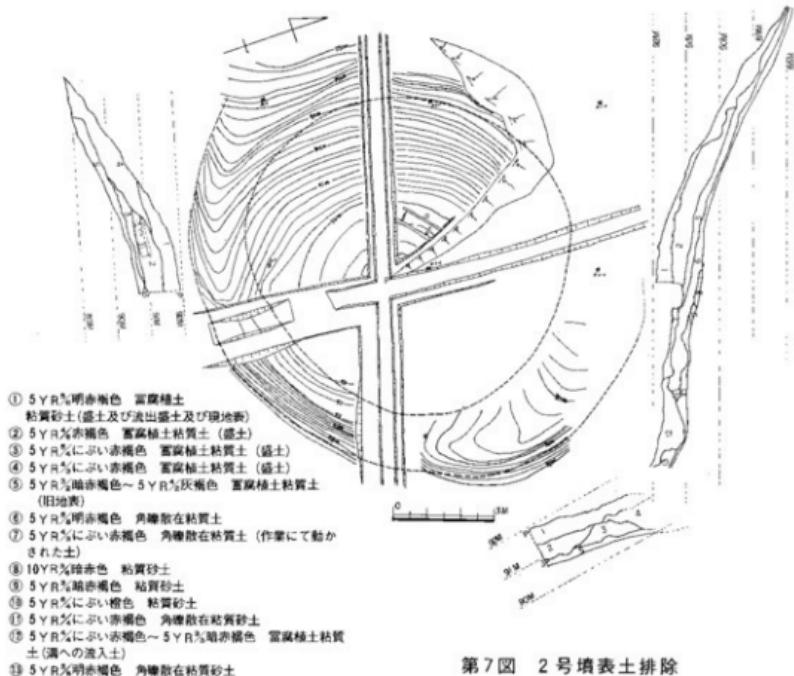


写10. 2号墳 石棺 (西より)

れた盛土である。盛土は1mに及ぶ所もあり盛土として掘り上げられた場所の違いから三種類に分ける事が出来た。その下には10cmから15cmの暗赤褐色から灰褐色に至る旧地表面と思われる層が横たわり、その下は場所によって異なる色調、土質の層となっていた。この埴丘の場所は丘陵全体で一番微細な土壤のある所で、盛土、旧表土共に微細な粒子であった。トレント壁面から埴丘西半分しか判然としないが、切り込み、掘り込み跡は見当らず埋葬施設の有無など判然としなかった。



第6図 2号埴作業排土除去

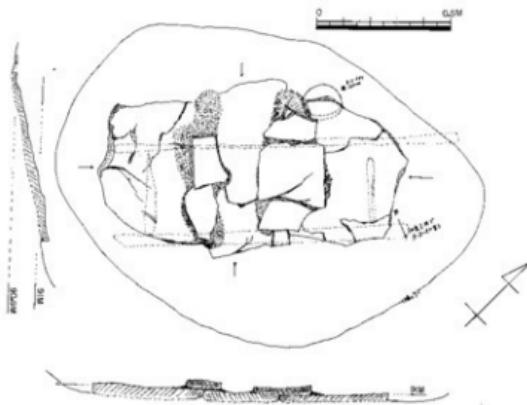


第7図 2号埴表土排除

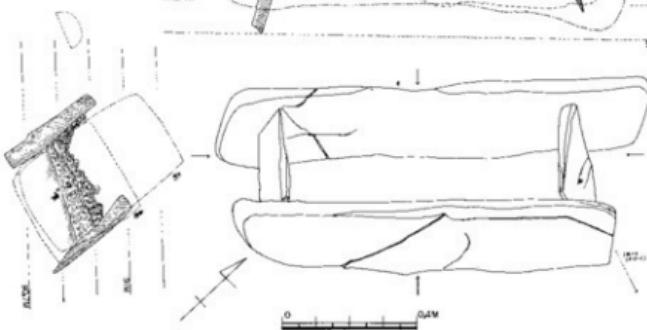
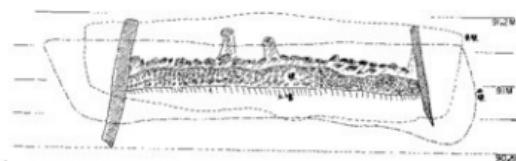
トレンチ両側に幅20cm、又中央未破壊部分を南北に幅20cmのベルトを残し、表土を剥ぎ溝部の露出にかかる。溝内部、表土中からは土器片の出土は見られなかった。墳丘径9.6m、高さ約2m、1.6mから2.4mに至る幅の溝が、東より南を廻り西にかけて半円状に掘られ盛土とされていた。

ベルトを残し盛土を徐々に掘り下げる。中心と思われる地点より約1m北西寄りに石棺蓋を検出。3枚の凝灰岩の石板が並べて置かれ、その縫目上には小さな石板が置かれ青灰色粘土で固定されていた。石棺蓋北端に蓋杯の蓋が伏せられて約35をのぞかせていた。

石棺を開く。灰褐色の極く微細な粒子の土が石棺蓋までいっぽいにつまっており、筋にかけながら掘り下げる。玉砂利と土とが入り混った部分、その下から西に傾斜した玉砂利の層、玉砂利の下は土で旧地表に土色、土質は似ていた。石棺は幅28cm、長さ88cm、高さ32cmの小型であった。それが40度の角度で北西に傾き、石棺前後の石板も約10度の角度で内傾し



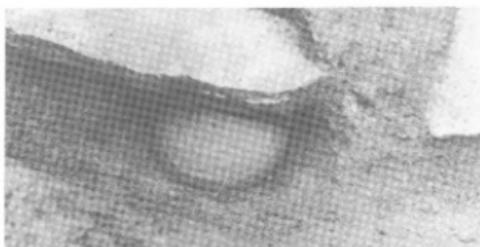
第8図 2号墳石棺蓋



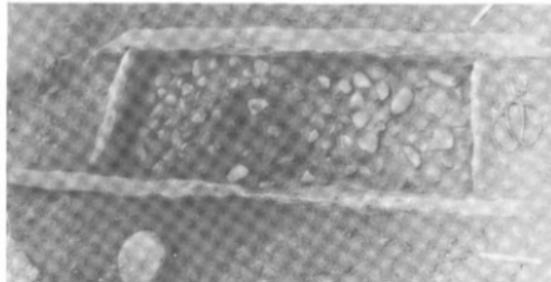
第9図 2号墳石棺

ていた。墳丘築造後、後代に至って盛土全体が北西に地すべりを起したものと思われる。石棺は旧地表上に約60cm盛土した後、穴を掘って旧表土中に組み立て、埋めもどし、更に墳丘上に盛土をしたものと思われる。他の部分からは変化を見られず。隣接する

3号墳とは接触部分が破壊されているため、時代の前後関係は不明。2号墳上の作業堆土中より出土の土器片は全て3号墳関係の土器と思われた。



写11. 2号墳 杯出土状況



写12. 2号墳 石棺蓋を取る

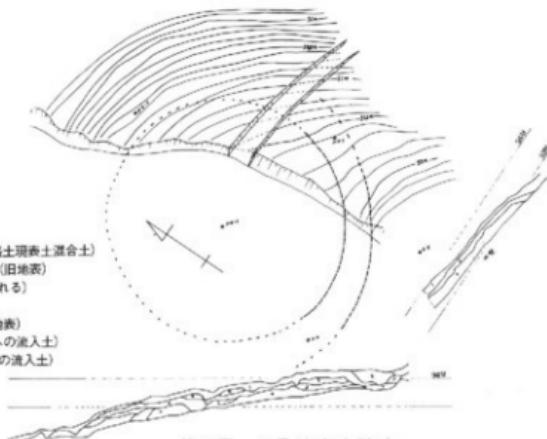
4. 3号墳

3号墳は近くが道路を作る時削り取られて、残された部分も削平がひどく、調査前は違うかも知れぬと疑問視した。残された部分は北側だけで、現在10年前後の松が植樹されており、古くは果樹園で

あった事が
窺われた。

まず残さ
れた部分の
縦面の観察
をする。現

- ① 5 YR 5/4明赤褐色 富蘿縫粘質砂土(盛土現表土混合土)
- ② 5 YR 5/4に近い赤褐色 富蘿縫粘質土(旧地表)
- ③ 5 YR 5/4褐色 黏質砂土(盛土と思われる)
- ④ 旧地盤
- ⑤ 7.5 YR 5/4明褐色 富蘿縫粘質土(旧地表)
- ⑥ 7.5 YR 5/4褐色 富蘿縫粘質砂土(溝への流入土)
- ⑦ 10 YR 5/4黒褐色 富蘿縫粘質土(溝への流入土)
- ⑧ 7.5 YR 5/4に近い褐色 富蘿縫粘質土(流入土)



第10図 3号墳表土除去

在表土となっている地層は、流入土、盛土、腐植土の混合されたものと思われた。二か所ばかり盛土と思われる部分もあったが、すぐ下は墳丘築造前の地表と思われる層があり、次いであまり風化されない複雑な地層が観察された。

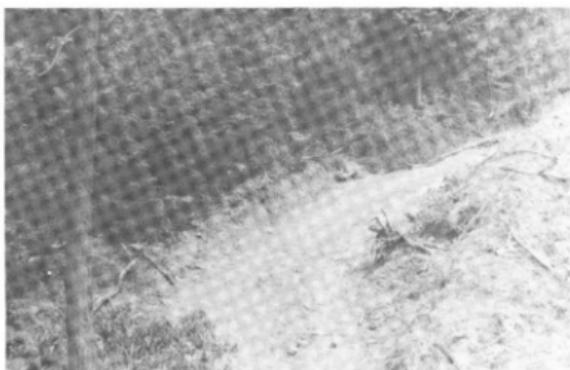


写真13. 3号墳 西南より望む

中心部を東西に道路

が走り、南側は作業堆土がうす高く3m以上も盛り上げられていた。これらを排除して調査したところ、路面と同水準まで削平されており埋葬施設の片鱗も発見できなかった。壁面に出ていた溝跡は、東側路面上に幅約1m深さ5cmから7cmで全長約6mにわたって検出された。その角度から墳丘径8m、東側に幅1m以上の溝のあった事が窺われた。高さの点は全く不明である。

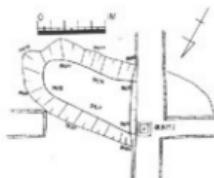
5. 4号墳

4号墳は3号墳を北西側に、5号墳を東北側に隣接して6号墳、5号墳、3号墳、2号墳と続く稜線からはずれたアウトロー的な觀がある。この墳丘も果樹園



- ① 5 YR 5/4明赤褐色
富腐殖粘質砂土(表耕土)
- ② 7.5 YR 5/4褐色
粘質砂土(盛土)
- ③ 7.5 YR 5/4がい褐色
富腐殖粘質土(旧地表)
- ④ 7.5 YR 5/4明褐色
角礫散在粘質土
- ⑤ 7.5 YR 5/4褐色
富腐殖粘質砂土(溝への流入土)

第11図 4号墳 土 墓



第12図 4号墳

利用の地で、南側は急な斜面となり樹木がなければ1号、2号、3号墳に比べて見晴しの良い地点といえる。若い松と雑木の地である。

墳丘中心部より東西、南北と十字に30cm幅のベルトを残し、明赤褐色の表土を剝ぐこと約20cm、本来盛土であったものが耕されて変化したものらしい。3号墳墳丘裾を左廻してきた旧道が大きく廻って4号墳西側を削り、3号墳との中間を抜けているので西から北西にかけては不明な点が多い。溝部を露出する。

墳丘径4.6m、高さ60cm、約90cm幅の溝が東北から東を廻って南へ引円を描いているのを検出。墳丘中央部に長径3m短径1.2mの橢円形土壙らしいものを検出、硬度の変化を認め橙色の盛土を試掘した。にぶい褐色の旧地表で止まった深さ20cm、その間土色、土質共に他と比して変化は認められなかった。墳丘築造時、盛土の寄せ具合で現われた変化で、埋葬施設としての土壤ではない様に思われた。旧地表でも変化認められず。



写14. 4号墳 北西より望む

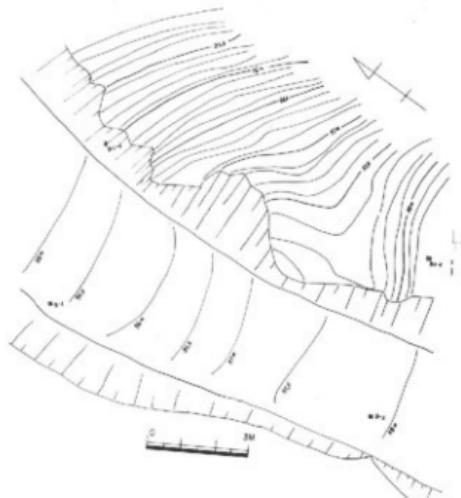


写15. 4号墳 土壙

6. 5号墳

5号墳は全く削平を受けなかった墳丘で、12号、10号、6号、5号墳と続く一連の尾根の12、10、6号墳と西に向って階段状に下ってきた斜面が傾斜を強め、同時に尾根幅を狭めてきたのが再び尾根幅を広め、緩斜面となり始めた首に位置し、10年前後の桧が植樹されていた。南側斜面に生い茂った雑木や60年を超す松樹が無ければ南に視野が広がって郡家平野を一望できる位置でもあった。

墳丘はこの位置では北西から南東に向って登る道路によって約3/4を破壊さ



第13図 5号墳

れ、東側約 $\frac{1}{4}$ が手つかずで残されていた。

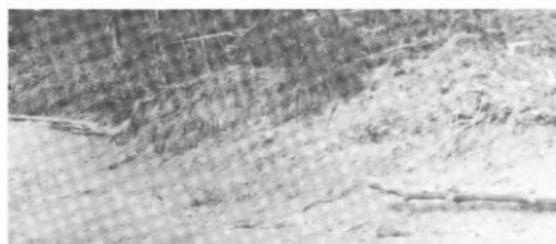
まず残存部分壁面の観察をする。橙色の盛土の上に1cm内外の腐植土がうっすらと乗っている。位置的に腐植土の蓄積が許されなかったのかも知れぬ。墳丘裾の方には盛土が流出し、その流出土の蓄積が大量にあった。

未破壊部分道路に添って30cm幅のベルトを残し、表土剥ぎ及び溝部の露出にあたる。墳丘西南側に積み上げられていた作業排土の除去にあたる。

作業排土上下の墳丘も路面と同水準まで掘り下げられていた。

墳丘径9m、高さ残存部分で約1m、東より南を廻り西南への $\frac{1}{4}$ 円をした幅1.4mの溝を検出。残存部分の掘り下げ、路面等の調査から埋葬施設の手がかり及び隣接4号墳との時代の前後関係は不明、東南溝中出土の土器片は、墳丘裾斜面の反対斜面からなので、6号墳関係と思われる。

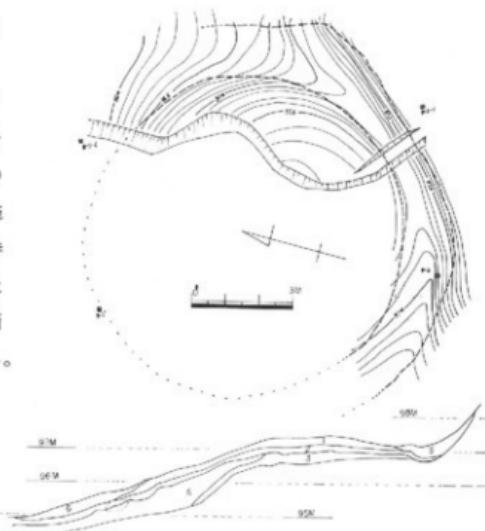
- ① 5YR 5/4 暗色 塵片混入粘質土（盛土）
- ② 5YR 5/4 明赤褐色 密緻粘質砂土（旧地表）
- ③ 5YR 5/4 暗赤褐色 無縦散在粘質砂土
- ④ 5YR 5/4 暗色 粘質砂土
- ⑤ 5YR 5/4 ぶい赤褐色～5YR 5/4 巨赤褐色 腐殖質粘質砂土（溝への流入土）
- ⑥ 5YR 5/4 ぶい赤褐色 腐殖質粘質砂土（盛土流出土）



写16. 5号墳 南より望む



写17. 5号墳 表土はぎ後 南東より望む



第14図 5号墳

7. 6号墳

6号墳は10号墳のある台地の6m下位の小台地上に築造されていて南東方向を除いた三方の墳丘裾部は急斜面となっていた。墳丘上及び周囲は40年前後の松が所々にあり、全面に10年を超す松が植えられていた。

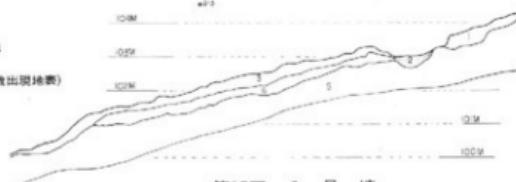
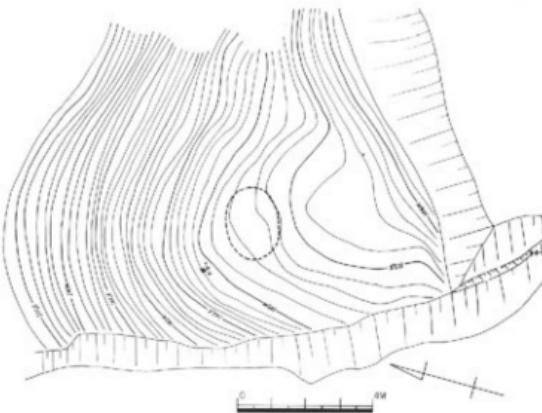
墳丘西南側に道路があり、墳丘の約1/4が切り取られていた。墳丘中央部には長径2m、短径1.6mの楕円形のくぼみがみられ盗掘穴でなかろうかと思わされた。聞くところによると、昭和の初期頃田畠の溝にかける橋として使用するため、古墳の石棺材がよく掘り出されたとか、その後の調査で浅く掘られた形跡を認める事ができた。

道路を作るために切り取られた部分の壁面を観察して、現在地表を形成しているものが、盛土の流れたものと腐植土の混合らしい事、それが墳丘裾部に大量に堆積されていることから、墳頂部の盛土の流出が大であったことが窺えた。

中央部を中心に30cm幅十字型のベルトを南東～北西、東北～西南に設定し表土を剥ぐ。盗掘穴と



写真18. 6号墳 西南より望む



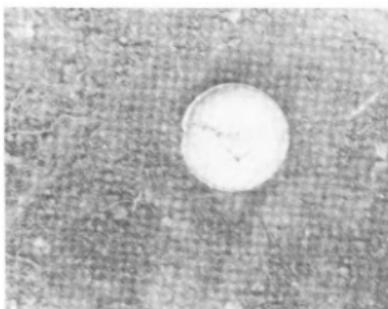
- ① 5 YR 5%赤褐色 富腐殖粘質土 (漬地帯)
- ② 5 YR 5%に少い赤褐色～5 YR 5%暗赤褐色 富腐殖粘質土 (漬への流入土)
- ③ 5 YR 5%灰赤褐色 富腐殖粘質土 (盛土出現地帯)
- ④ 5 YR 5%明赤褐色 角礫散在粘質土
- ⑤ 2.5 YR 5%橙色 角礫散在粘質土

第15図 6号墳

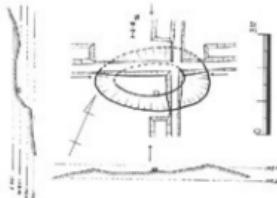
思われなくぼ地は石棺の有無、所在を探る試掘穴らしく、試掘の頃はもう少々深く掘つたらしいが、周囲の土の流出で浅くなつたものらしい。中心より南へ3m地点盛土直上（現地表下部）より後代になって祭祀に使用したと思える土器片出土。溝部を掘り周溝をもつ墳丘である事を知る。周溝を有する墳丘は他に12号墳だけである。墳丘径8.8m、周溝幅1m、高さ約1mが計られた。

盛土の掘り下げで、試掘穴直下及び周辺の盛土が、試掘穴堆積の腐植土によって変色しており、掘り下げるにつれて範囲が広がつて行くのを見て、南東より北西のベルト西南側に50cm幅のトレーナーを入れる事に変更した。トレーナー中一对の蓋杯が蓋付きで出土。内部には蓋までいっぱいに隙間なく極く微細な灰褐色の土がつまっていた。それからは内容物を推測する何ものも検出できなかった。蓋

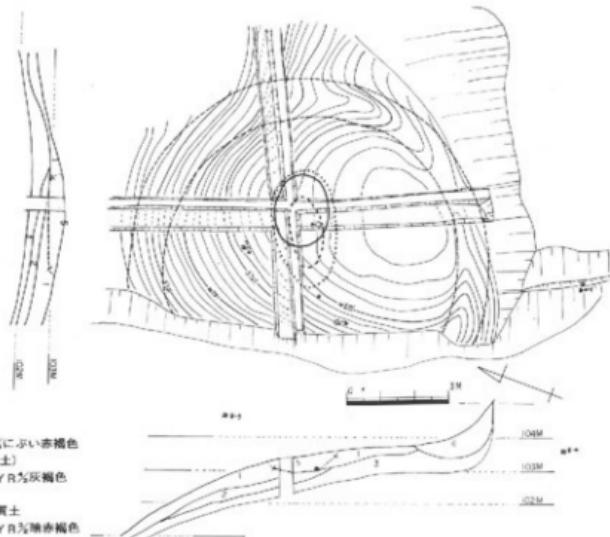
杯の出土と共に
土膚墓を検出。
底面を旧地表と
し、深さ20cm、
上面は幅1.8m、
長径3.2m、底面
で幅1m、長径
2mの楕円形で
あった。蓋杯の
位置から、當時



写19. 土器出土状況



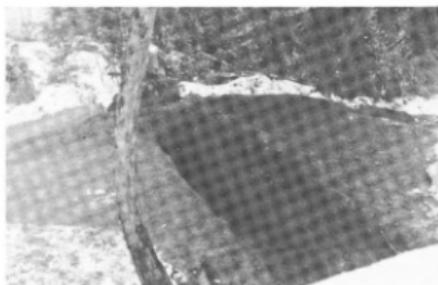
第16図 6号墳土壙墓



- ① 5YR 5/4明赤褐色～5YR 5/4にぶい赤褐色
角礫散在粘質土（盛土現表土）
- ② 5YR 5/4にぶい赤褐色～5YR 5/4灰褐色
富腐殖粘質土（旧地表）
- ③ 5YR 5/4褐色 角礫散在粘質土
- ④ 5YR 5/4にぶい赤褐色～5YR 5/4暗赤褐色
富腐殖粘質土（溝への流入土）
- ⑤ 5YR 5/4にぶい赤褐色（土堆）

第17図 6号墳

といえども食物を入れた食器を足もとに置く様なことはなかろうと考え、東北東を枕に横たえたものと思われる。土壙墓は地表を平にした後、約20cm盛土し、地表まで掘って埋葬、更に盛土して墳丘を築造したと観察された。旧地表面上何等遺構を検出できなかった。

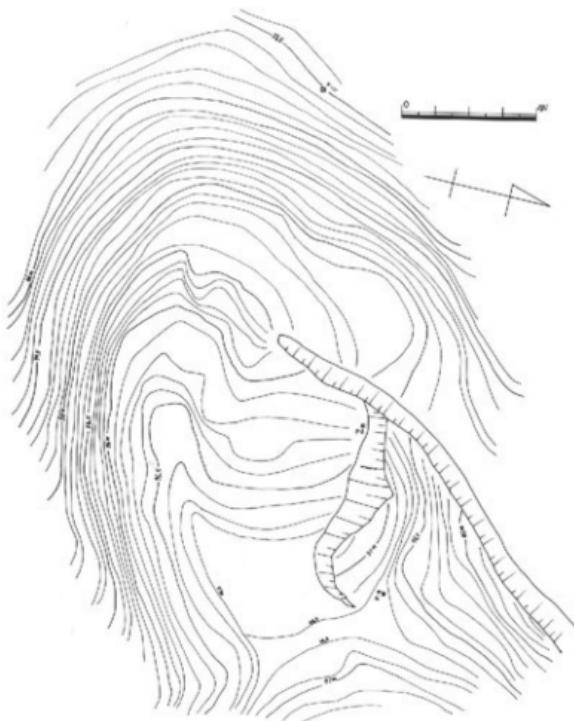


写20. 6号墳 東南より望む

8. 7号墳

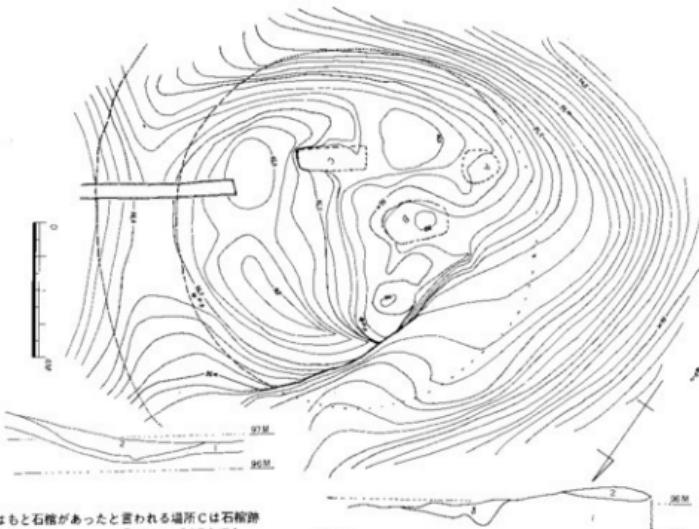
群集墳のあるこの丘陵は東端に一番の高所があり、そこに15号墳、その真西に14号墳、わずか北に傾いて13号墳、その13号墳から北西方向の2号墳まで続く12、10、6、5、3、2号墳はわずかに弧を描いて、北に中心をもつ円周上にあるようにみえる。これら墳丘を乗せた尾根が13号墳と12号墳の中間あたりで枝別れして、西へ向って伸びている。その枝別れした尾根上に11号墳、9号墳、8号墳、7号墳があり、7号墳を少し過ぎたあたりから急斜面でおちこみをみて丘陵はおわっている。

作業道路をみると、麓より登り、7号墳北



第18図 7号墳

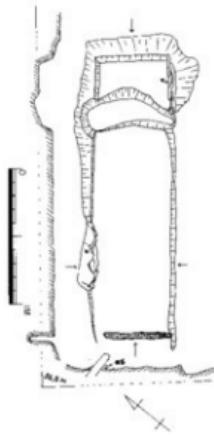
第19図
七号墳



10m位の所へ廻り込んで、この尾根に取りつき7号墳西側を削り、その地点で向きを変更、北東へ向って登り8号墳、9号墳を通過し、向きを北西にとり、10号墳の方向へとつけられ、10号墳南端で6号墳西南側を通り南東を向いて登って来た作業道路と直角に近い角度で交わり、10号墳上を花木の寄せ場としている。このため10号墳はほとんど壊されていた。6号墳脇を通って登って来た道路は、10号墳脇を通り抜け更に東へと登って、12号墳南部分を削り取って進み11号墳北側までつけられていた。

7号墳は郡家平野側に突き出た丘陵尾根の突端にあり、視野も広く、15個の墳丘中一番見晴しの良い地点に築造されたといえる。はじめのうち7号墳脇より西へテラス状に伸びる台地がありその裾斜面が幸い作業排土より露出していて、墳丘状に見え、それを調査するつもりで開始、作

第20図
七号墳石棺跡C



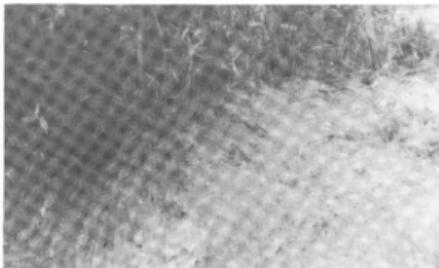
業排土除去。除去作業中石棺材及び土器類の出土を見る。道路によって立ち削られた墳丘北西部の壁面の溝跡などからこの場所に2個内外の前方後円墳を想定して作業排土の除去に当ったので大がかりな作業となった。

盛られた土を排除した後、テラス状に張り出した部分掘より東西に墳丘中心部へ向ってトレーナーを入れる。トレーナー壁面より果樹園時代の削平を知り、當時こやしを入れた溝穴を確認し、7号墳と関係のない台地と知る。

溝部の露出、墳丘裾部表土剥ぎをする。墳丘径約11m、東側に2.4m幅の溝あり、この溝より掘り上げられた土だけの盛土では墳丘の大きさに比べて少量過ぎるのではないかと疑問が残った。

削り取られた墳丘上の精査で墳丘南東の端近くにブルドーザーに押されて底部跡だけを残した石棺跡(C)を検出。2m×1.1mで旧地盤と思われるあまり風化作用を受けていない土の中に組み込まれた跡が残っていた。残存していた石棺材側壁片の内側に鉄器片(鉄1)があった。他に不自然なくぼ地が2か所あり、聞いた話と照合して石棺のあった場所らしい。

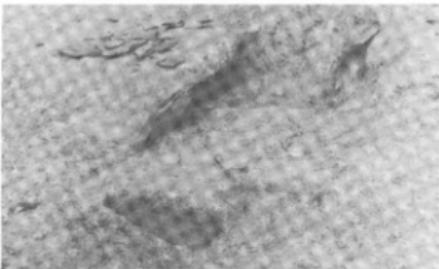
昭和初期の石棺材を田畠の溝の橋とするために掘り出した頃のことか、果樹園にするため削平した頃のことか石棺を開けて金環と鉄剣を取り出したとの話を聞く。8号墳境にある溝の中には自然蓄積の層しかみられず、その点より7号墳は8号墳ができる、その後に築造したものと思える。



写21. 7号墳 西より望む



写22. 作業排土中より 出土の石棺材



写23. 7号墳 石棺跡 (C)

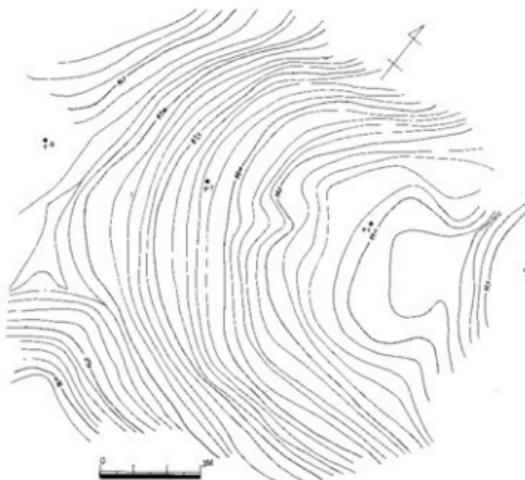


写24. 7号墳 作業排土除去後 東より望む

9. 8号墳

8号墳は7号墳の東、ゆるやかに登る斜面途上にあり、7号墳と同程度の視界を有し、同じように果樹園利用の地で雑木と灌木に覆わられていたらしい痕跡があった。削平を受けた墳丘は、尾根上を登って来る作業道路を中心部を通られてもあまり影響を受けていない。

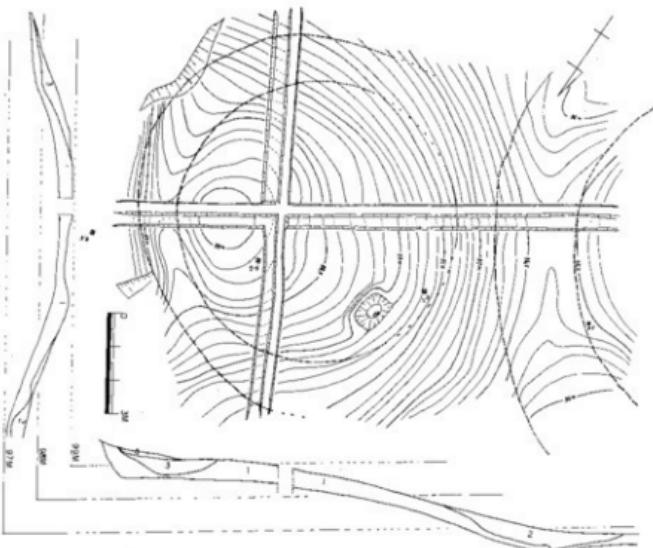
墳丘中心部に十字型50cm幅のベルトを東西、南東方向へ設定し、表土を剝



第21図 8号墳

第22図 八号墳

①	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
②	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
③	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
④	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
⑤	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
⑥	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
⑦	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
⑧	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
⑨	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色
⑩	2.5	Y R	赤褐色	赤褐色



ぐ、墳頂部は削平を受けていたのと、作業道路通過による削平で表土はほとんどみられず、墳丘裾部は墳頂部盛土の流出に依って結構厚く堆積していた。8号墳出土の土器片類はほとんど全部この墳丘北西部の流出して堆積し現在表土化した土の中から掘り出されている。總てといっても8個体しかないが、その内作図できたのは4個体、この4個体は6世紀初頭のものと思われる。他に6世紀初頭と思われるのは10号墳より1個体、12号墳4個体出土し4個体がそれに相当するようと思え、8号墳、10号墳、12号墳は出土した土器片よりいざれが最も古いかきめかねている墳丘である。

溝部の掘り上げをする。墳丘径8.2m、1.6mから1m幅の溝が南東から東を廻って北側へ円を描いている。残存墳丘高60cm。墳頂部の盛土はほとんど総て流出し地山が露出しており埋葬施設は判らず。石棺材破片もないところから木棺墓内至土壤墓であったろうと考えられる。



写25. 8号墳 東南より



写26. 8号墳 東より望む 先方にあるのが7号墳



写27. 8号墳より見下す

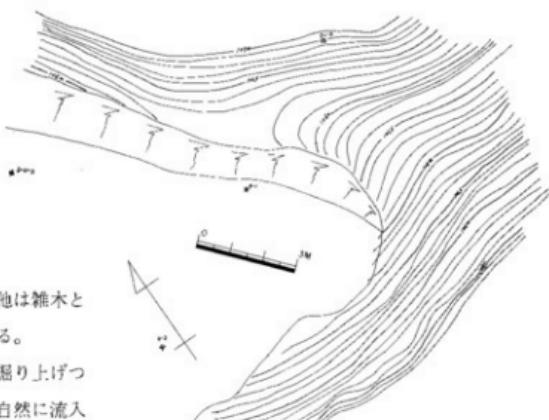
10. 9号墳

枝別れた尾根が11号墳墳丘裾より急斜面となって8m位落した所に小段丘があり、その上に9号墳が築かれていたものと思われる。墳丘は勿論、近辺一帯が作業道を作るために深く掘り下げられていて、調査時現況からは同報告書第2図稻荷古墳群所在丘陵図を参照し推測する以外に途はなかった。元図は統合小学校建設設計画時に西日本建設コンサルタンクト㈱による測量図である。

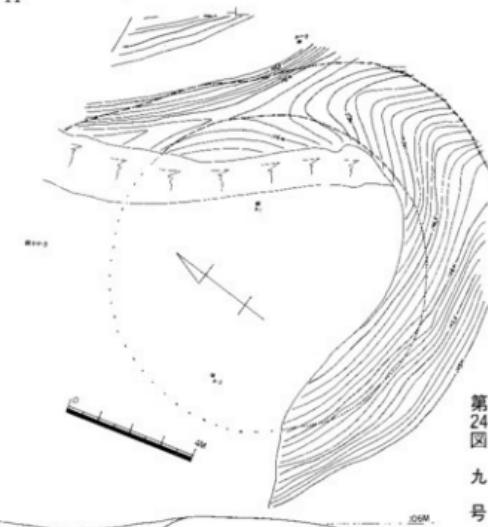
墳丘東側は50年位の松、他は雜木と灌木が生えていたと思われる。

わずかに残された溝部を掘り上げつつ観察した。墳丘溝部には自然に流入し堆積したとは思われない層があり、9号墳築造後数年内至数10年経って11号墳が築造され、9号墳溝中へ直上の11号墳よりの流入土が堆積したものと考えられた。

残存溝部及び墳丘の形態より推測して、墳丘の直径は約9.2m位あり、溝部は北から東にはほぼ1.5m幅で△印を描いて残存している所から東側にもう少し溝部があり、



第23図 9号墳



第24図
9号墳

- ① 5YR 5/4 橙色 角礫砂混入粘質土
- ② 5YR 5/4 灰褐色 富腐植粘質土 (流入土)
- ③ 5YR 5/4 灰褐色 富腐植粘質土 (流入土)
- ④ 5YR 5/4 明赤褐色 富腐植粘質土 (流入土)
- ⑤ 5YR 5/4 明赤褐色 含腐植粘質土 (流入土)



写28. 9号墳 西南より望む
先方の高まりは11号墳



写29. 9号墳 東北より望む

段丘上面に約5m位の溝があったものと思われた。墳された墳丘の盛土等は谷合に落し込まれており、石棺材、土器類の破片は落し込まれた土の上面等から検出する事はできなかった。

11. 10号墳

10号墳は12号墳墳丘擦より西側に7m位急落した段丘上に築造されていた。推測墳丘径12mで、この丘陵上15個の墳丘中最大であったらしい。地山の盛り上がり状況及び溝幅等から考へても上記のこと�이える。

墳丘上及び周囲には50



第25図 10号墳

年位の樺の木、樅、桧、松及び雜木が植生しており、破壊される前には墳丘上でつづじの咲く頃は花見の宴を開いたとか。

墳丘は原型を知っている人の話を総合してみると調査時にのせられている排土を除去した状態の地山上約1.2m位盛土さ

れていたらしい。これ等

盛土は北から西側へかけての斜面下へ落
下させられ、平坦になったところへ作業
道路取り付けに依って生じた排土を盛り
あげていた。

最初盛り上げられた作業排土除去に要する膨大な作業量をおそれ溝部の掘り上げをする。溝内部は、自然に流れ込んだ腐植土を含む土と落葉によっての腐植土で充満し、直上12号墳築造による落下土砂の流入はみられなかった。この事から12号墳築造後この10号墳は築造されたものと思われた。結局盛り上げられた作業排土は除去。墳丘西側に幅約2m位未破壊の墳丘裾部あり、露出させた溝部等より墳丘径12mを計測、溝幅は約2mであった。

作業排土中より石棺材破片及び土器片の出土をみたが、地山等からは何もなかった。

12. 11号墳

11号墳は枝別れした尾根の分岐点に近く位置し、広い視野を持ち、墳丘上及び近辺は60年位の松林となっていた。

墳丘中央部に中心を持つ十字型30cm幅のベルトを東西、南北に設定し表土を剥ぐ。中央部に凹みがみられ、腐植土がたまっていた。中央部の凹



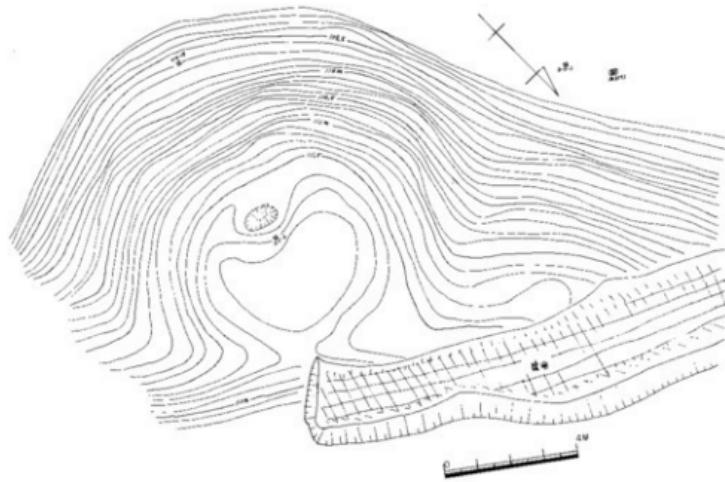
写30. 10号墳作業排土除去後 東より望む



写31. 10号墳 作業排土中出土の石棺材



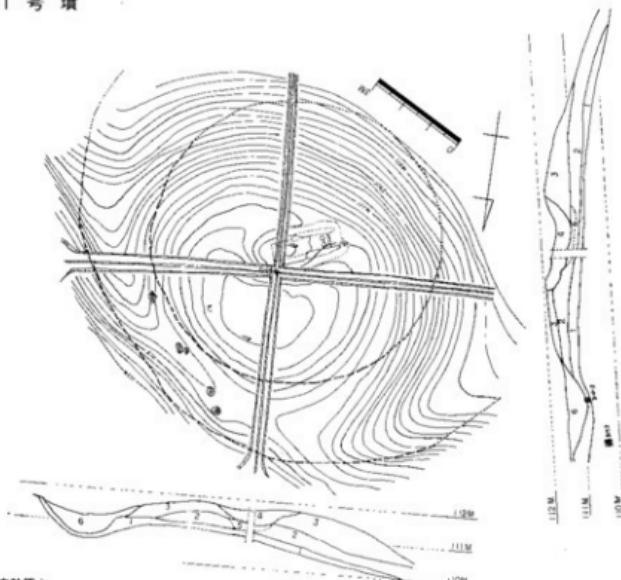
写32. 11号墳 西より望む



第26図 11号墳

み以外には墳丘
裾部が急斜面と
なっている故か
腐植土の堆積は
みられなかった。
中央部西側凹み
腐植土の下から
石棺材がのぞい
ていた。

溝部の掘り上
げ、東側より北



- ① 5YR 5% 棕色　角礫散在粘質土
- ② 5YR 5% に少い赤褐色　含腐植粘質土（田耕土）
- ③ 5YR 5% 棕色　粘質土（埴土）
- ④ 5YR 5% に少い赤褐色　富腐植粘質土（盗掘穴注入土）
- ⑤ ほとんど③と変化なし、含腐植粘質土（廻り方）
- ⑥ 5YR 5% に少い赤褐色～5YR 5% 棕色　富腐植粘質土（溝への流入土）

第27図 11号墳表土はぎ後

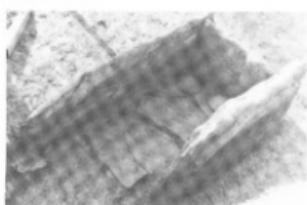
を廻り西側まで半円形で幅約2.2mの溝が検出された。墳丘径8.2m、高さ約1.2mを計測することができた。

盛土及び石棺部分の掘り下げ、東北～西南を軸とする箱式石棺の西南半分が残っていた。

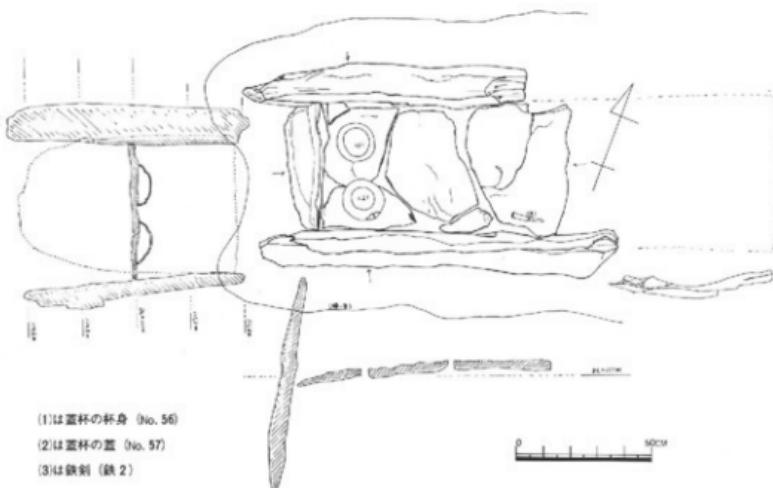
石棺蓋や抜き取られた石棺材は麓に運び出され、畔道の橋などにされたと思われる。抜き取り痕を計測し石棺の内法幅47.5cm、同長さ165cm、上より35cmの所に板石を敷きつめているのを計測。その敷石西南の上に一对の蓋杯が、横に6cmの間隔で伏せて置かれていた。西南壁より7.5cm離れ、左右壁の中央部に位置して、ちょうど枕として使用したかのように見えた。鉄器片（鉄2）が、蓋杯を枕として



写33. 11号墳表土はぎ後 北西上面より望む 盗掘穴あり



写34. 11号墳 石棺



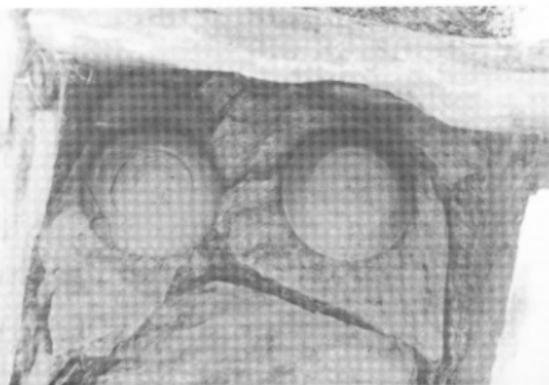
第28図 11号墳石棺

寝かせたとすると身体の右側、頭上壁面より70cmの位置にあった。

この蓋杯を見た時、長瀬高浜第1号墳が頭をかすめた。土器を枕にした例は鳥取県内で14例以上あり、鼓形台器10例、甕2例、高杯2例が知られている。

しかし蓋杯の例はまだ聞いていない。ことに

よるとこの丘陵1号墳から伏せているのが検出されたが、同じ様に使用されたのかも知れない。
石棺は地山を掘り組み込まれ、盛土をしたと観察された。



写35. 11号墳 石棺内杯及び杯蓋

13. 12号 墳

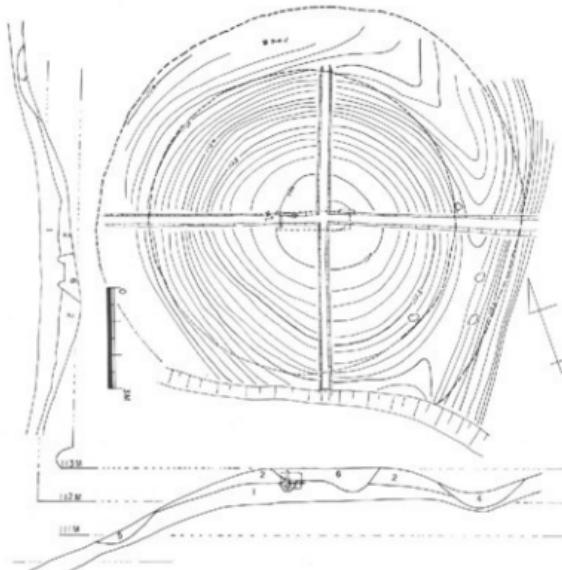
12号墳は丘陵尾根がゆるやかに西に向って下り、これから急斜面や段丘等様々な変化を見せようとする西端、馬の背のはずれに相当する位置にあり、人工的に掘られた溝に依つて離れ小島の観がする。雑木、灌木、松の植生で、松林に移行しようとする境界になっていた。

中央部を中心東西、南北に30cm幅十字型のベルトを設定、表土を剥ぐ、中央部盗掘穴には腐植土の堆積がみられた。溝部の掘り上げ、これには周溝がめぐらされていた。周溝を持つ墳丘は同古墳群中2基あり、6号墳とこの12号墳だけである。6号墳からは木



第29図 12号墳

⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬
 7.5 YR 7.5 YR 7.5 YR
 YR 7.5 YR 7.5 YR
 R 7.5 YR 7.5 YR
 濃色
 黒褐色
 含鐵鉄角礫土
 滅への土入土
 箱式石棺墓
 12号墳表土
 角礫散在粘質土
 角礫散在粘質土 (田地盤)
 角礫散在粘質土 (塗土)



第30図 12号墳表土はぎ後

溝跡すら見当らず、土壌墓と思われたが、この12号墳は箱式石棺墓であった。墳丘径は6号墳の8.8mに対して9m、周溝幅1mに対し2m、高さ1mに対して1.6mであった。

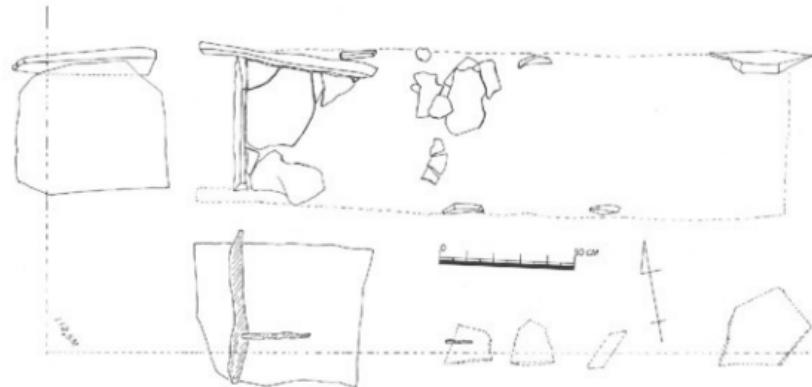
盛土の掘り下げ、中央部中心より南1m位の所より土師直口壺が出土。石棺内部に相当する所より蓋杯の蓋片3個体が出土。6世紀初頭のものと思われるこれらの土器片及び10号墳溝中に12号墳築造時の土が入っていない点より10号墳より古いと思われ、8号墳との比較の場合、8号墳出土の土器片が12号墳出土の土器片より少々時代が古いのではと思われた事より8号墳に次いでこの12号墳が古い墳丘と考えられた。石棺は残存石棺片及び抜き取り痕より、内法47.5cm×165cm、上面より27.5cmの所に石板を敷きつめており、11号墳と似ていた。石棺の組み立ては、11号墳と



写36. 12号墳 北西より望む



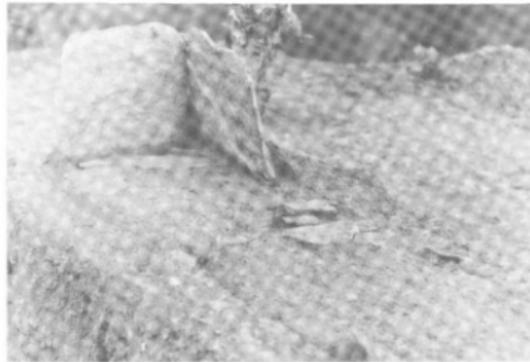
写37. 12号墳 作業風景



第31図 12号 墓 石棺

同様地山を掘り下げ、石棺を組み込んで盛土したものと思われる。石棺材抜き取りの跡が広く深いため、判然としない点が多かった。

墳丘地山上に南より北へ向う溝状造構あり、幅40cm、深さ約5cmで、墳丘築造前使用の山道と思われた。

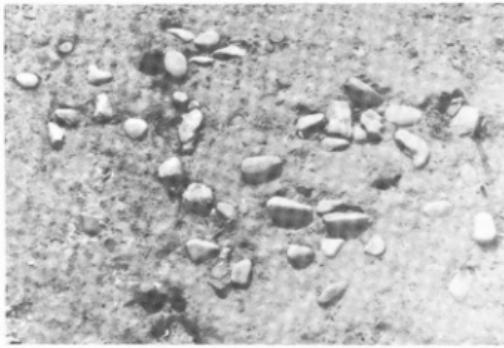


写38. 12号墳 石棺跡

14. 石 群

13号墳西側墳丘標部より平に西に広がり、中央部に多少ふくらみをみせた台地。試みに腐植土を剥いでみた。45個の河原石が出現した。他に河原石は11号墳溝中より5個、12号墳溝中より4個、作業排土中から5、6個発見されている。

石は13号墳標部より表土を

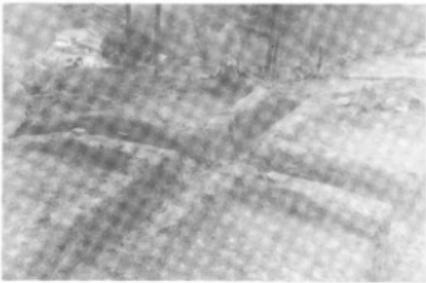


写39. 石群 北方上面より望む



第32図 石群

剥ぎ、地山を露出させた上に何等かの形態に置き並べられたものと思われる。置かれた石の下の土は動かされておらず地山そのままであった。13号墳関係の祭祀の場所なのか？、それにしても一片の土器片も検出されなかった。11号墳、12号墳溝中に落ち込んだ石は溝底部に近く、墳丘築造前後に作られたと思われた。



写40. 石群 下部試掘後 東北より望む

15. 13号墳

13号墳は石群地東側の60年位の松林の中に在り、中心より東北側 $\frac{1}{4}$ は扇形状に北側へ落下し崩れていた。中心より地すべりを起したものらしい。表土を剥ぐ、異状を認められないまま溝部の掘り上げ、墳丘径9.4m、東より南側にかけて $\frac{1}{4}$ 円の1.6m幅の溝、東より西南にかけては有るか無きかの溝らしきもの、これは墳丘築造後、墳丘整形のために少しあげたものと思われた。

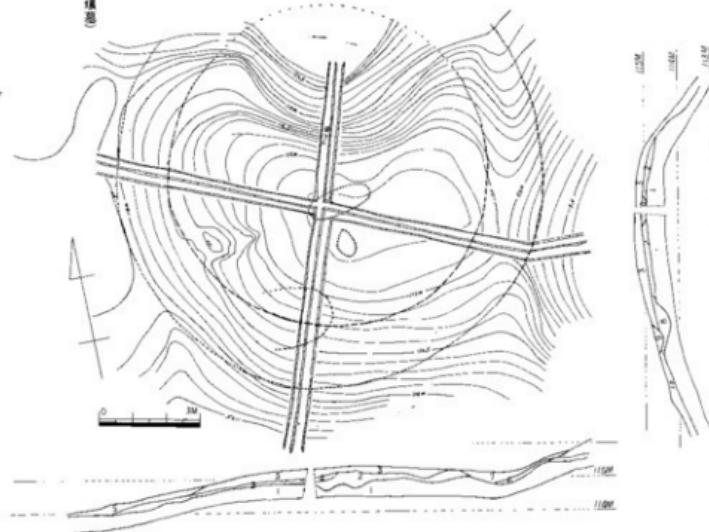
墳丘の高さ60cm、盛土部の掘り下げにかかる。盛土の中より蓋杯の杯身及び蓋と思われるが小

片過ぎて判断しかねる
7世紀中葉頃の土器片
出土。盛土の中から検
出されただけに墳丘は
その時期以降のものと
考えられ、丘陵上部に
ある事に驚く。盛土を

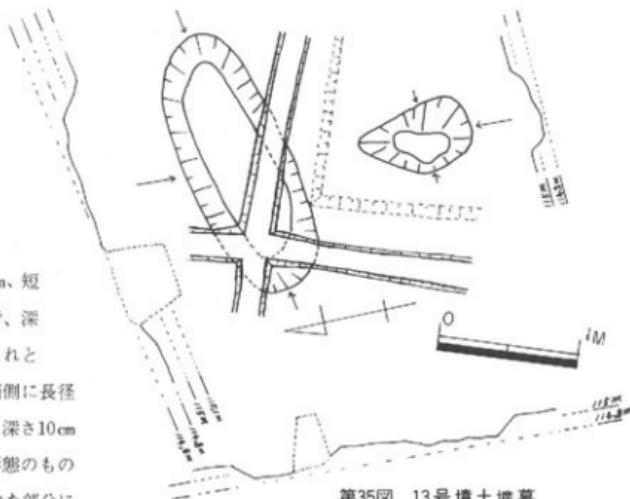
⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
7.5	YR	5	5	5	5	5	5	5	5	5
YR	5	YR								
赤褐色	黄褐色									
高麗砂透入粘質土										
(下地表)	(中地表)	(上地表)								
はどんと										
はどんと										
はぎ後										



第33図 13号墳



除去しおえ
 て旧地表土
 にかかると
 中心部より
 やや南寄りに土
 壇2点を検出。
 軸を東西にす
 る土壇は長径1.9m、短
 径70cmの階円形で、深
 さ20cmであり、これと
 軸を直交させて南側に長径
 80cm、短径50cm、深さ10cm
 の階円形に近い形態のもの
 とであった。くずれた部分に
 埋葬施設があったのな
 ら別だが、この土壤の
 一方は土壤墓であろう。
 墓丘南側溝部に相当
 する所に土壤らしきも
 のあり、これは墓丘築
 造前の自然地形の凹地
 と思われた。13号墳は
 地山に埋葬後、墓丘を
 築造したものと思われ
 る。



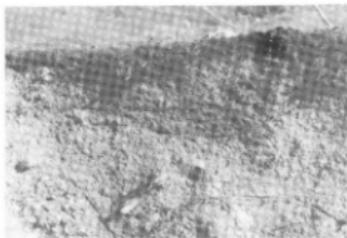
第35図 13号墳土壤墓



写41. 13号墳 西方上部より望む



写42. 13号墳土壤 南東より



写43. 13号墳 壁面南より

16. 14号墳

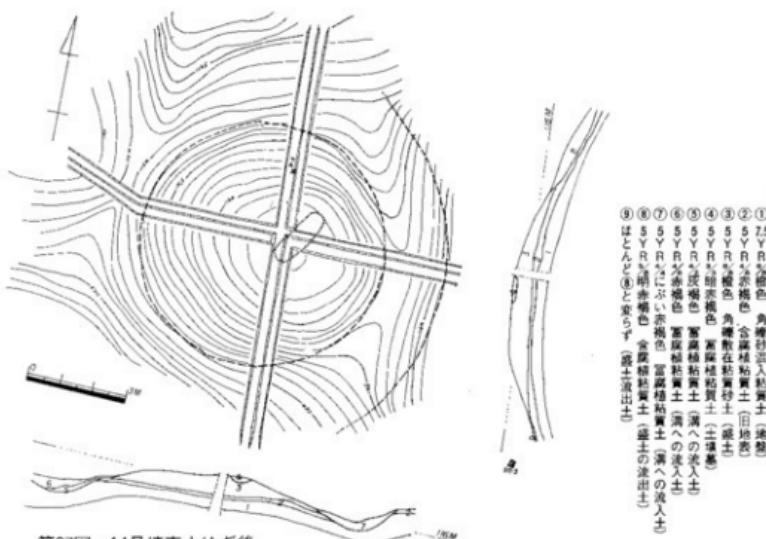
14号墳も60年位の松林の中にある墳丘で、小型だが盛り上がりのある、盗掘穴らしい跡の無い唯一の墳丘であった。

墳丘中央部を中心に幅30cm十字型のベルトを東西、南北に設定して表土を剝ぐ、腐植土の厚さ約6cm、中心よりやや東寄りに磁北に対し約30°の角度に輪線をもつ東北—西南の土壤が盛上面に現われた。

1.8m×0.6mの角丸長



第36図 14号墳



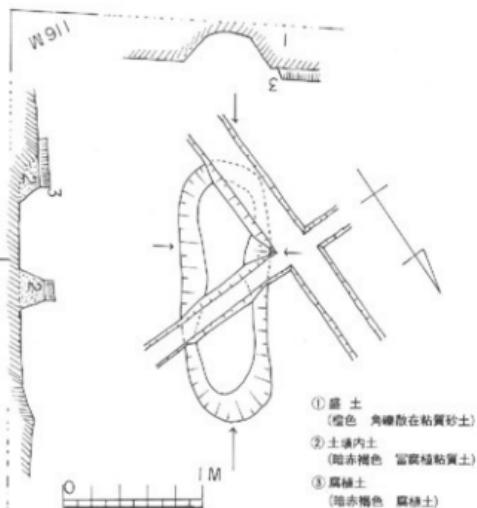
第37図 14号墳表土はぎ後

方形で深さ約20cmあった。土壤内部からは年代判定の手がかりとなるものは発見されず、ただ上面の腐植土中より7世紀中頃と思われる蓋杯の蓋らしきものが一点出土しているきりだった。

溝部を掘り上げる。幅2mの溝は北北東より東をまわり東南東に約1/4円形にあり、墳丘径7.2m、高さ約1mを計測する事ができた。

盛土を掘り下げる。盛土中及び地山からは何等変化らしいものは検出されなかった。結局土壤は一つだけ木桶の跡も検出されなかったので土壤墓であったろうと推察する。

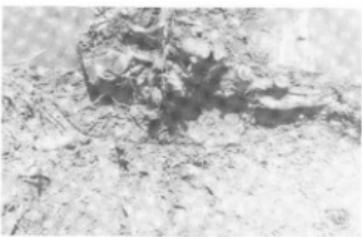
この墳丘は盛土をし、それに穴を掘って埋葬、更に盛土をしたものと思われる。盛土中に埋葬施設をもち、地山にまで変化の及ばない墳丘は、15個の墳丘中埋葬施設の検出できたものの中で唯一のケースといえる。



第38図 14号墳土壤墓



写44. 14号墳 西方より望む

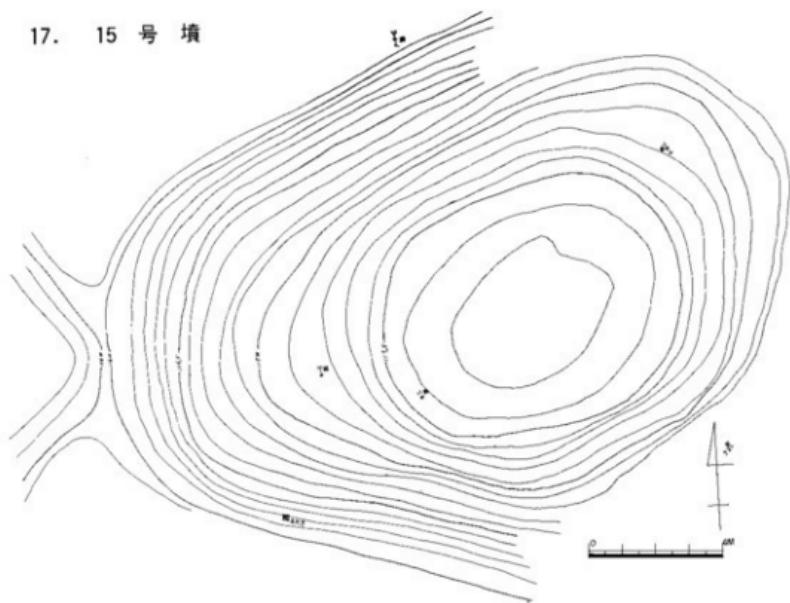


写45. 14号墳 壁面東より



写46. 14号墳 東より望む、先方は13号墳

17. 15号墳



第39図 15号墳

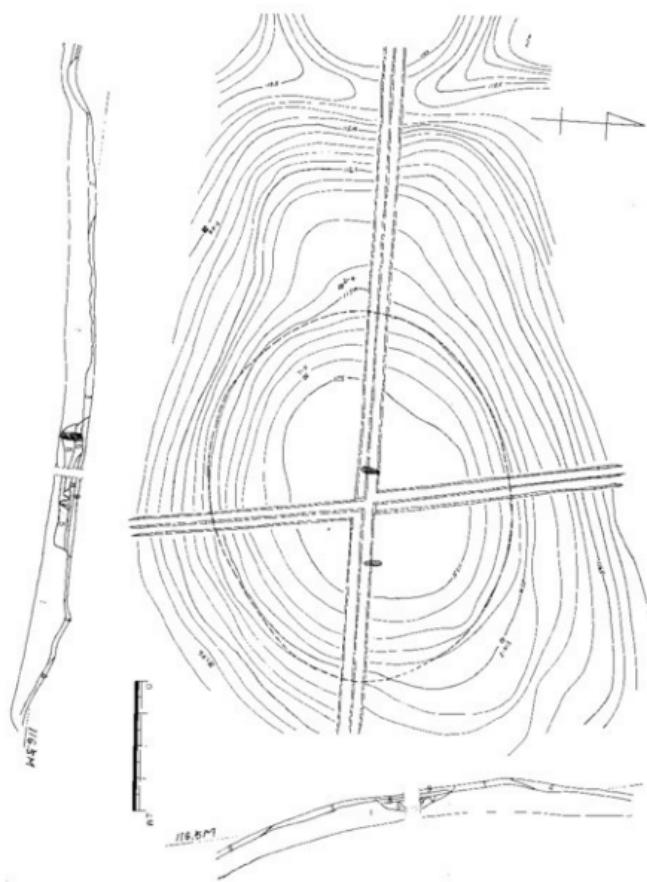
15号墳は丘陵最東端の一番高所にあり、丘陵はそのまま北へ下り20m位下った所で、北から南へ伸びる丘陵尾根に直角に近い角度で交っている。

墳丘は盛土の層が薄く、人工的削平の痕はみられなかつたが、周囲への流出が多い。

腐植土が主となっている表土を剥ぐと盛土と同じ色調の盛土流出土が広く拡がっており、墳丘の範囲を見付け出すのに苦労する。わずかに黒味を帯びた部分が円形を描いているところから掘り当てる事ができた。他の墳丘からは、盛土と地山との間に旧地表と思われる層を見いだせたのにこの15号墳からは、それらしきものは検出されなかった。この墳丘は地山に箱式石棺を組み込んだ後、周囲の土をかき集めて石棺を覆い、更にかき集める範囲を広げていったために旧地表はなくなつたのかも知れぬ。



第40図 15号墳石棺材



第41図 15号墳表土はぎ後

又他の墳丘と異なる事は溝を持たない事である。かき集めた土を盛り上げた後、盛りあげられた部分と他の部分は角度の違いによって画されていたらしい。

この墳丘の特異点は一片の土器も検出されなかったことである。

墳丘中心部は盗掘による凹みに腐植土がたまり、その中には石棺材の破片と思われる凝灰岩の小片が検出された。

箱式石棺の前後壁と思われる凝灰岩の剝離石材2個が検出されたが、その2個の石材の間隔が

大きすぎた。

盗掘によって動かされた土の部分を取り除いて、抜き取り痕より判断しようと努めたが、動かされた土の範囲が広すぎて判然としない。2個の箱式石棺が縱に



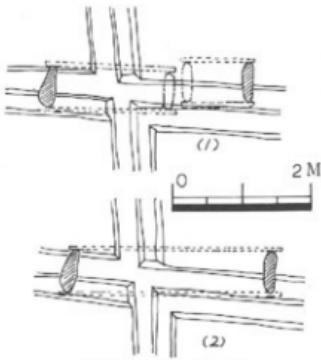
写47. 15号墳 西より望む



写48. 15号墳 石棺材



写49. 15号墳 石棺の一部東より



第42図 想像図



写50. 15号墳 石棺の一部南より

並んで作られていたのかも知れぬと推察、しかも2個あったとすれば作られた時期は同時でなければ土層上成立しない。

墳丘は長径11.4m、短径9mの橢円形をした高さ約60cmのものであった。

18. 古墳一覧表

(墓の計測は、周溝墳、半周溝墳、も周溝墳、土周溝墳とさまざまなもの)
で、墳丘径と溝部の幅は別々に計測し、記録も別々に記載することとした。)

古墳番号	墳丘の規模	溝の状態	埋葬施設の有無及び数	埋葬施設の種類	埋葬施設の規模	確認できた副葬品の有無	備考
1号墳	直径約7.6m。 高さ約1.4m。	斜面上部に 土窓。 幅約1.6m。	不明。	不明。 土壙墓?	不明。	一对の蓋杯。	盗掘穴あり。それが 埋葬施設調査の支障 となる。
2号墳	直径約9.6m。 高さ約2m。	斜面上部に ほぼ平窓。 幅約2m。	1基判明。	箱式石棺。	幅28cm。 長さ86cm。 高さ32cm。	蓋杯の蓋。	墳丘の半分以上は破 壊されていて、不明 部分多し。
3号墳	推定 直径8m。 高さ不明。	斜面上部に わずかに検 出する。	不明。	不明。 土壙墓?	不明。	不明。	墳丘の半分以上が破壊 されていて、ほとん ど不明。
4号墳	直径約4.6m。 高さ約0.6m。	斜面上部に 土窓。 幅約0.9m。	不明。	不明。 土壙墓?	不明。	不明。	削平及び果樹園とし ての耕作の為、ほとん ど不明。
5号墳	直径約9m。 高さは残存部分 で約1m。	斜面上部に 土窓。 幅約1.4m。	不明。	不明。 土壙墓?	不明。	不明。	墳丘の半分は破壊され ており、不明部分多 し。
6号墳	直径約8.8m。 高さ約1m。	周溝。 幅約1m。	1基。	土壙墓。	長径約2m。短 径約1mの楕円 形の土壙墓。	一对の蓋杯。	残存部約1/3。破壊度 合に比べて少ない。
7号墳	直径約11m。 高さ不明。	斜面上部に 土窓。 幅約2.4m。	1基確認。 他に2基。 計3基。	1基は箱式石 棺跡。他も同じ。	確認した箱式石 棺跡は、2m× 1.1m。	鉄剣片を右筋 跡より検出する。	削平ははだしく、 不明部分多し。
8号墳	直径約8.2m。 高さ約0.6m。	斜面上部に 土窓。 幅約1.5m。	不明。	不明。 土壙墓?	不明。	出土中に上 器類あれども 不明。	削平及び盛土の流出 多く、ほとんど不明 である。
9号墳	直径推定して 約9.2m。 高さ不明。	斜面上部約 1/4窓残存。 幅約1.5m。	不明。	不明。	不明。	不明。	墳丘盛土等は谷間に 落ち込み。石棺材、 土器類の検出不可。
10号墳	直径約12m。 高さ推定2.2m。	斜面上部に 土窓残存。 幅約2m。	不明。	不明。 箱式石棺?	不明。	作業排土中よ り検出されど、 不明。	盛土及び、地山まで 削除されていた。
11号墳	直径約8.2m。 高さ約1.2m。	斜面上部に 土窓。 幅約2.2m。	1基。	箱式石棺。	内法 幅47.5cm 長165cm 高35cm	一对の蓋杯。 及び鉄剣片。	石棺材の抜き取りは あったが、金具のに みて温存されていた。
12号墳	直径約9m。 高さ約1.6m。	周溝。 幅約2m。	1基。	箱式石棺。	内法 幅47.5cm 長165cm 高27.5cm	石棺内外相当 地点より上器 片検出。	石棺材抜き取り以外 に少々残された形跡 あり。
13号墳	直径約9.4m。 高さ約0.6m。	斜面上部に 土窓。 幅約1.6m。	1基。	土壙墓。	長径約1.9m。短 径約0.7m。深さ 約0.2mの楕円形。	無し。	破壊、削平跡はなか ったが、判然としない 墳丘であった。
14号墳	直径約7.2m。 高さ約1m。	斜面上部に 土窓。 幅約2m。	1基。	土壙墓。	1.8m×0.6m× 0.2mの角丸長 方形。	無し。	墳丘15基中唯一の未 破壊凸項。
15号墳	長径11.4m。短 径9mの楕円形。 高さ約0.6m。	溝なし。 2基とも思 える。	1基。 2基とも思 える。	箱式石棺。	不明。 実測不可。	不明。	石棺部の破壊はは だしく、不明点多し。
石群	45個の河原石が置き並べられていた。他に11号墳溝中に5個、12号墳溝中に4個、作業排土中から5・6個検 出されており、約60個以上の河原石が置き並べられていたことが知れる。何に使用したか不明。						

第4章 出土遺物

1. 出土遺物一覧表

番号	器種	出土地点	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
1	蓋杯の杯	1号墳盛土中より 副葬	蓋受けの立ち上がりが直に近く、 1.9cmもある。身口径11.8cm、高さ 5.45cm。	杯底部窪切りの外、内外共に横ナ ゲ仕上げ。	内外共浅黄色。細かな胎土で焼成 や、秋かい。
2	蓋杯の蓋	1号墳盛土中より 副葬	口と対。 神門形を半分に切った様な形をし ている。蓋径13.8cm。	蓋頂部切りの外、内外共に横ナ ゲ仕上げ。	内面浅黄色。外表面白から浅黄色。 煙のかつたあとあり。細かな胎 土で焼成や、秋かい。
3	蓋杯の蓋	1号墳南側溝の中より	蓋の立ち上がりが直に近い。全体 に丸味を帯び、ていねいな作りで ある。身口径14cm。	内外共に横ナゲ仕上げ。	内面灰白色。外表面灰色。細かな 入り組み細か。焼成や、秋。
4	椀	1号墳南側溝の中より	うす手仕上げ。	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。口縁部鋸歯の か、つたあとあり。細かな胎土で焼成 非常に秋。
5	椀	1号墳南側溝の中より	ていねいな作り。 身口径15cm（±1mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。 底部系切り痕あり。	内外共に灰白色。口縁部に擦の あとあり。細砂でなめらかな胎土。 焼成非常に秋。
6	椀	1号墳南側溝の中より	非常にうす手な作品。 身口径13cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。口縁部に煙の あとあり。細砂で少々ざらつく胎土。 焼成非常に秋。
7	直口盃か 台付盃（1 取）	1号墳南側溝の中より	うす手な作品。 口径9cm（±2mm）成形後縫より 力が弱りゆがんでいる。	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。口縁部に擦痕 あり。細砂な胎土少々ざらつく。 焼成や、秋。
8	碗	1号墳南側溝の中より	厚手。身口径12cm（±1mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。 底部系切り痕あり。	内外共に灰白色。細かな胎土でな めらか。焼成極秋。
9	椀	1号墳南側溝の中より	厚手。身口径12.8cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。細砂な胎土でな めらか。燒成極秋。
10	椀？	1号墳南側溝の中より	うす手仕上。口縁部金屬の折り曲 げに似た陥没感がみられる。身口 径16cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。なめらかな胎土。 焼成秋。
11	椀	1号墳南側溝の中より	厚手。身口径13.4cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。細砂な胎土少々 ざらつく胎土。焼成極秋。
12	椀	1号墳南側溝の中より	厚手。身口径13cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。なめらかな胎土。 焼成極秋。
13	高杯？	1号墳南側溝の中より	うす手。口径18cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。細砂な胎土が なめらか。燒成極秋。
14	椀	1号墳南側溝の中より	厚手。身口径15cm（±2mm）口縁 より1.5cm下がった内側に4脚の沈 みあり。	内外共に横ナゲ仕上げ。 底部系切り痕あり。	内外共に灰白色。細砂入り胎土な れどなめらか。燒成極秋。
15	高杯？	1号墳南側溝の中より	厚手。径12cm（±2mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。なめらかな胎土。 焼成極秋。
16	椀	1号墳南側溝の中より	厚手。口径6.4cm（±1mm）	内外共に横ナゲ仕上げらしい。 底部系切り痕あり。	内外共に灰白色。細砂入り胎土。 焼成極秋。
17	平底盃？ 土師器	1号墳南側溝の中より	底部よりの立ち上がりが直に近い。 合口径6.4cm（±2mm）	底座ははだしく成形手法は不明。	内外共に浅黄色。砂の混入多くざ らつく。焼成や、秋。
18	椀	1号墳南側溝の中より	削とうす手。口径15.2cm（±1mm）	内外共に横ナゲ仕上げ。	内外共に灰白色。口縁部埋痕あり。 細砂入りなれどなめらかな胎土。 焼成秋。
19	広口盃？	1号墳土中。 3号埴地？	厚手な作品。口がはり、首部には 4脚の脚書き沈線あり。首径9cm (±2mm)	内外共に横ナゲ仕上げ。	内面灰白色。外表面灰色。細砂な胎 土でなめらかな胎土。焼成や、秋。

番号	器種	出土地點	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
20	蓋杯の蓋	2号墳石棺 墓に副葬	口縁部より裏は直に立ち上っている。縁より1.2cmの所に幅3mmの沈線あり。直径12.2cm。	蓋頂部の荒切り部をのぞいて内外共に横ナデ仕上げ。自然鉗(暗オーリーブ色)が手面以上にかかっている。	内外共に灰白色。その外壁六筋版に暗オーリーブ色の自然鉗がかかる。細網入り少々さらつく胎土。焼成硬い。
21	碗 (鉢?)	5号墳東側 溝の中より	器高2.2cm、口径10.4cm、皿状で、底部よりゆるやかな広がりをみせ、11壁部に至って急に傾いている。底部に近く一本の沈線あり。	内外共に横ナデ仕上げ。底部切り痕あり。	内外共に淡黄色。砂混入少々さらつく胎土。焼成軟い。
22	蓋杯の杯	6号墳土壤 墓内副葬	蓋受けの立ち上がりは直に近く身11部で外への広がりを見せている。身口径10.9cm。	底部の荒切り幅大。その他は内外共に横ナデ仕上げ。	内外共に灰白色。沙混入少々さらつく胎土。焼成硬い。
23	蓋杯の蓋	6号墳上槽 墓内副葬	22と同。高径4.4cm、蓋径12cmと器高は高く、蓋1.2cmに段があり、そこより蓋1にゆるやかな丸味を帯びる。	蓋頂部の荒切り幅大。内外共に横ナデ仕上げ。	内外共に灰白色。外斜面特に瘤痕あり。砂混入少々さらつく胎土。焼成硬い。
24	碗 (皿状)	6号墳上南 窓土中	底部より11段部へのびる縁は直線状、口径11.8cm、高径は4.1cm、11段に比して器高低く皿状に近い。此鉢系から底の外に直でおさえた焼二輪一本あり。	内外共に横ナデ仕上げ。底には切口があり、土器を持ち上げた時、底部のたれ下がりを直す施廻二輪あり。	内外共に灰白色。2%程度に2~5mmの礫石を含んだ細緻な胎土。焼成極軟。
25	蓋杯の杯	7号墳上作 業排土中	底部は平面状になり、底部より蓋受け部まで直線状にしている。蓋受けは水平に近く、立ち上がりは内部へ傾いている。底部に近く沈線一本あり。	底部の荒切りを除いて、他は内外共に横ナデ仕上げ。	内面灰色、外面灰白その上に淡黄色の幕がかかった様に塗っている。粗粒砂混入胎土。焼成硬い。
26	蓋杯の杯	7号墳上作 業排土中	底部より蓋受け部へのびる縁は直線、まるやかな作りとなっている。蓋受け立ち上がりは内部へ向かって傾斜している。	底部の荒切り痕も丸跡を帯びている。ていねいな横ナデ仕上げ。底部荒切り後鋸いV字形切り痕あり。理由不明。	内面灰色、外面灰白から灰色に変化をみせている。きめ細かな胎土。焼成硬い。
27	蓋杯の蓋	7号墳上作 業排土中	器高4.6cm、蓋口径12cmと器高は高い、蓋口縁よりの立ち上がりは直である。	回転窓切り、回転横ナデ仕上げ。	内面灰白色、外面灰黄で黄褐色の瘤痕あり。きめ細かな胎土。焼成や、軟。
28	蓋杯の蓋	7号墳上作 業排土中	器高4cm、蓋口径15cmと大型となり、蓋口縁1.2cmに引っかき痕の沈線二輪あり。	回転窓切り、回転横ナデ仕上げ。	内面灰白色。外面灰黃色。きめ細かな胎土。焼成や、軟。
29	蓋杯の蓋	7号墳上作 業排土中	均整のとれた曲線、沿縁の均一性に入れた感するすらすら。	回転横ナデ仕上げ。	内外共に灰白色。細緻な胎土。焼成硬い。
30	高杯 (鉢?)	7号墳上作 業排土中	台径11cm、浅い4層の沈線がみられる。	内外共に回転横ナデ仕上げ。	内外共に灰白色。きめ細かな胎土。焼成極軟。
31	蓋杯の杯	7号墳上作 業排土中	蓋受けの立ち上がりに内側に掘く内部掘1回きりと段がついている。底部荒切り後開口部に施て跡十を付着させた痕あり。口径に比し器高は低い。	回転窓切り、回転横ナデ仕上げ。	内面灰白色、外面灰白色。砂混入多く胎土自体荒い感じ。焼成硬い。
32	蓋杯の蓋	7号墳上作 業排土中	全体に丸味を帯び、厚くぼってりした感じ。或形接ぎ切際、窓、窓の先端は平行ではなく上に向いていたらしく、中心部が凹んでいる。	回転窓切り、内外共に回転横ナデ仕上げ。	内面灰白色、外面全体に瘤痕が強く赤褐色となっている。わずかに礫片入れどきめ細かな胎土。焼成硬い。
33	蓋杯の杯	7号墳上作 業排土中	成形は非常にていねい。縁高1.8cmに横ナデ等に少々細妙をひつかけて出来たと思われる沈線あり。	回転横ナデ仕上げ。	内面灰白色、外面灰白色。細緻な胎土でなめらか。焼成硬い。
34	高杯	7号墳上作 業排土中	口縁内部に沈線、内外共に胎骨を調整痕あり、断面を見れば、末焼成の部分が灰白色に焼成された部分に含まれている。	回転横ナデ、胎骨調整。胎骨用として2.5YR 6%に近い赤褐色の調料が内外共に塗布されている。	内外共にに近い赤褐色削削衛布。砂混入胎土自体あらい。焼成硬い。
35	蓋杯の杯	7号墳上作 業排土中	口径9.5cmと小型の杯。蓋受けの立ち上がりは極端に内傾。	回転横ナデ仕上げ。	内面灰白色、外面に近い黄褐色。砂混入胎土。焼成硬い。
36	不明	7号墳上作 業排土中	口径4cm、首部に径6mmの穿孔あり、首は直に立つが短し、肩部既に凝の沈線あり。	全体にビリビリ小さくはがれ調整不明。首が直に立っているので短割窓か?	内面灰白色、外面灰白色。砂の混入なくなりながら胎土。焼成硬い。

番号	器種	出土地点	形態上の特徴	成形手法上の特徴	著者
37	直口壺?	7号墳上作 墓跡土中	口径12.8cm非常にうすくていねいな作品。口縁部より2.5cmの所で低い折出あり。	回転模ナギ仕上げ。	内面灰白色に赤黒色斑点、外面部黒而強い摩損を残す。なめらかな胎土。焼成硬い。
38	高杯 or 碗	7号墳上作 墓跡土中	少々厚手な作品、曲線が美しい。 口径12.5cm。	回転模ナギ仕上げ。	内面明瞭灰褐色、外面部灰色。なめらかな胎土。焼成や、軟。
39	匙 or 直口壺?	7号墳上作 墓跡土中	非常にうす手な作品。口径7.8cm、 口縁部1.8cm外部に段あり。	回転模ナギ仕上げ。 内面に煙痕あり円筒か?	内面明灰褐色、外面部灰色。砂入胎土。焼成硬い。
40	高杯 or 碗	7号墳上作 墓跡土中	小片すぎてはっきりしないが、作 品としては、ていねい。口径13cm (± 2mm)	回転模ナギ仕上げ。	内面灰褐色、外面部に輪オーリーブ 灰色が残っている。珍ららしい胎 土。焼成硬い。
41	広口壺?	7号墳上作 墓跡土中	くの字に折れた首部、立ち上がり 角度はきりせず、口径18cm (± 5mm)。	肩底がひどく、成形手法等判明せ ず。	内外共に淡黄褐色。大粒沙入りの あらい胎土。焼成や、軟。
42	蓋杯の杯	7号墳上作 墓跡土中	ていねいな作品。焼成の時間が短 いのか未焼元部分に多い赤褐色の 部分が灰褐色の焼えられたものに包 まれている。	回転模ナギ仕上げ。	内外共に灰色。断面部(未焼元部 分)に赤褐色、なめらかな胎土。 焼成少々軟。
43	有蓋高杯 ?	7号墳上作 墓跡土中	脚部最小径4.8cm、脚の広がり大。 口径21cm (± 5mm)。	回転模ナギ仕上げ。	灰色。胎土なめらか。焼成少々軟。 未焼元部分に赤褐色。
44	広口壺?	7号墳上作 墓跡土中	首径16cm、胴径27.5cm、幅広、火 短の壺。日のあらい胎状のもの、 圧痕が、脚下部にあり、裏面には うすくついている。背部より胴中に かけて回転させながら付けた沈 縫があり。	内面は回転模ナギ仕上げ。 外部唇状のものでしめ付け後、圓 盤沈付け。	内面黄褐色、外面部灰色。肩から背 部にかけて黄褐色。胎土なめらか。 焼成硬い。
45	甕 or 壺	7号墳上作 墓跡土中	口径21cm (± 5mm) 脚のはりゆる やか。口縁部に段あり。	回転模ナギ仕上げ。肩内部には竹 を割ったものか、梗片に嵌る不確 な叩きめ痕あり。	内外共に黑色の煤痕、下地の色不 明。砂混入あらい胎土。焼成硬い。
46	甕	8号墳上作 植土中	直筒型。5世紀の形態をもって いる。首部はうすく、その所に 3本の波型沈縫紋あり、2.5cmに7 本の波型沈縫紋がある。その二組 の沈縫紋の間に幅3mm、深さ1 mmの溝が入っている。器高11.6cm、 口径10.6cm、首径6cm、胴径10.6 cm、穴径1.4cm。	回転模ナギ仕上げ。	内面灰色が基調。首部から口縁部 にかけて、うすい灰褐色に変化、外 面部灰色が基調。肩部が灰白色にな っている。胎上には1%程度の7 mm-2mmの粗粒混入。焼成硬い。
47	有蓋高杯 or 広口壺	8号墳上作 植土中	口縁部に段が付く11本の書きき波 型沈縫紋、幅3mm、深さ1mmの溝 があり、8本の書きき波型沈縫紋。 他の甕と似ているところから5世 紀末の広口壺とも思える。	回転模ナギ仕上げ。 書きき波型沈縫紋入り。	内面に赤褐色の上に褐灰色が 乗っている。外面褐色。粗砂な 胎土。焼成硬い。
48	蓋杯の蓋	8号墳上作 植土中	口径10.6cm、器高施塗4.3cm、小型 で窓たかく、口縁部の立ち上がり が直に近い。うすくして、ていね いな作品。	回転模ナギ仕上げ。	内面灰色、外面部灰褐色から灰黃色 へ移行して行く色調、暗褐色の斑 点あり。粗砂な胎土。焼成硬い。
49	高口壺 or 甕	8号墳上作 植土中	口径11.4cm、口縁部立ち上がり直に 窓たかく、口縁部の立ち上がり が直に近い。うすくして、ていね いな作品。	内面共に回転模ナギ仕上げ。2本 の波型沈縫紋らしきものがみられ る。	内面に赤褐色の上に暗赤褐色の斑 点が乗っている。外面部暗赤褐色。 粗砂な胎土。焼成硬い。
50	無蓋高杯 の脚 or 筒型器物 の足	10号墳上作 墓跡土中	口径部径14.6cm、そこより5cmで 外径4.8cmに狹まっている。全体に 鋲いリッチの作品、造型的口縁部、 2本の波型沈縫紋、そこから0.5cm 離れて下がり、又内側する。そこ にも2本の波型沈縫紋あり。	回転模ナギ仕上げ。 二か所に2本の波型沈縫紋あり。	内外共に暗青褐色。1.5%程度に幅 1mmから3mmの粗粒沙混入あらい 胎土。焼成硬い。
51	筒型器物	10号墳上作 墓跡土中	小片ではっきりしないが、円筒形、 上部高径21cm、下部底径21cm、そ の間4.1cm、3本の沈縫その下部に 4本の波型沈縫紋、その下部が幅 5mm、深さ2mmの溝がある。	回転模ナギ仕上げ。 3段の沈縫、4段の波型沈縫紋、 幅5mm、深さ2mmの溝、その下部 に4段の沈縫あり。	内外共青褐色。細かな胎土でそれ 自体あらい。焼成硬い。

番号	器種	出土地点	形態上の特徴	成形手法上の特徴	備考
52	蓋杯の杯	10号墳上作 墓葬土中	口径10.2cm、高さ4.2cm、小型で器 高かし、蓋受けの立ち上がり難く、 1.5cmもある。	同軸模ナデ仕上げ。 施切り。	内面灰色、外面淡黄色。径4mm以 下の砂粒5%位、細かな粘土。燒 成硬い。
53	広口壺	10号墳上作 墓葬土中	口径23cm(±5mm)。口縁部1cm下 に三角形の突帯あり、大きさに比 してうすい。	同軸模ナデ仕上げ。	内面灰色、外面暗青灰色。細砂な 粘土。焼成硬い。
54	有蓋高杯 の蓋 or 蓋杯の蓋	10号墳上作 墓葬土中	口径16cm、つまみ部分欠損し判明 しないが、高さ5cm。口縁部より 2.7cmのところに直角に最も高い段がで きている。	同軸窓切り、横ナデ仕上げ。	内面黃灰色、外縁灰白色。5mm~ 3mm程度の砂粒入っているが、さ め細かな粘土。燒成少々軟。
55	雙or直口 蓋土師器	10号墳上作 墓葬土中	首径8cm(±2mm)、胴径10.6cm、 唇は振らずなめらか。	施窓はなはだしく、調整不明。	内外共に褐色。細砂でなめらかな 粘土。燒成や、軟。
56	蓋杯の杯	11号墳石棺 内	口径12.3cm、器高4.6cmと器高比 低く、底部2mmの段があり。粗雑 な作品。50°と対して出土。	同軸窓切り、横ナデ仕上げ。 内面に15~16個の瘤痕あり。	内外共に灰色。外面にうすく埋漬 あり。砂凝入粘土。燒成硬い。
57	蓋杯の蓋	11号墳石棺 内	口径14.5cm、器高4.1cmと器高比 低い。蓋頭部2mmの段あり。粗雑 な作品。50°と対して出土。	外表面模ナデ後、2mmの垂直な段を 付けて同軸窓切り。内部に左手人 さし痕、中指の圧痕あり。	内面灰色、外面紫灰色で全体に強 い壓痕あり。大粒砂多く混入、ざ らざらした粘土。燒成硬い。
58	小型有蓋 短縦壺?	11号墳盛土 中	首径5cm、5cm下がった所の周径 18.2cm、肩水平に張っている。肩 下部に目のある目口痕、肩よ り口にかけ、同軸窓入り。	肩下部はナラの木の切口なのか。 叩きしめた痕。外部にはそれをお きたれた痕?肩下部の小切れ痕。肩よ り上部は表面同軸窓入り。内面 横ナデ。	外表面は所白地(下地は白に近 い)。細砂極度某入り、なめらかな 粘土。燒成や、軟。
59	蓋杯の蓋	12号墳石棺 地点	60と類似。口径10.4cm、器高不明、 蓋頭部立ち上がりは意匠に近く、 更頭部へ移行する曲りは約0.5cmの 段が付き直角に丸味を帯びる。口 縁部切り込み複し。	同軸窓切り、横ナデ仕上げ。	内面灰色、外面灰白色。細砂な粘 土。燒成硬い。
60	蓋杯の蓋	12号墳石棺 地点	口径10.6cm、器高4.4cm、器高比高 い。特徴59と同じ。蓋頭部円形。 うす手な作品。	同軸窓切り、横ナデ仕上げ。	内外共成灰色。細砂な粘土。燒 成硬い。
61	蓋杯の蓋	12号墳石棺 地点	口径12.4cm、器高2.2cm、持鉢等 (59)(60)に似ている。たゞ、裏 口縫の立ち上がりが、蓋京部移行 所、水平に2mm程に張り、鋭い 絶角で移行。	同軸窓切り、横ナデ仕上げ。	内面灰色、外面灰白色。2%程度 に2~5mmの小礫片混入。細砂な 粘土。燒成硬い。
62	直口壺 土師器	12号墳石棺 墓地点	口径11.6cm(±1cm) 施窓ひどし。 肩の張らず、脚部削と無い。	内面脚部施窓あり下部には瓜腹ら しく、肩下部は指を折り曲げ多少 右に引いた痕、背部不明。脚部は スリ消し?外側肩より上部はスリ 消しち?下部は筋目調整。	内外共に褐色。外部全面及び内部 は首部より上全体に赤色塗装が做 布されている。1~2mm程度の砂 混入し粘土白体さらつく。燒成や や軟。
63	蓋杯の杯 ?	13号墳盛土 中	うす手な作品。系底外径8cm(± 1mm)、底縁斜め切りあり、系底は 後に付けたもの。	同軸模ナデ仕上げ。底部斜め切り。	内外共に灰色。細砂な粘土でな めらか。燒成硬い。
64	蓋杯 or 皿	13号墳盛土 中	うす手な作品。系底外径7.6cm(± 3mm)、底部斜め切りあり、系底は 後に付けたもの。	同軸模ナデ仕上げ。底部斜め切り。	内外共に灰白色。なめらかな粘土。 燒成軟。
65	蓋杯?	14号墳上作 墓葬土中	系底径9.6cm、系底部受け痕みら れず。	同軸模ナデ仕上げ。系切り部はさ かきにして、けり残したか?	内外共に灰白~淡黄色。細砂な粘 土。燒成や、軟。

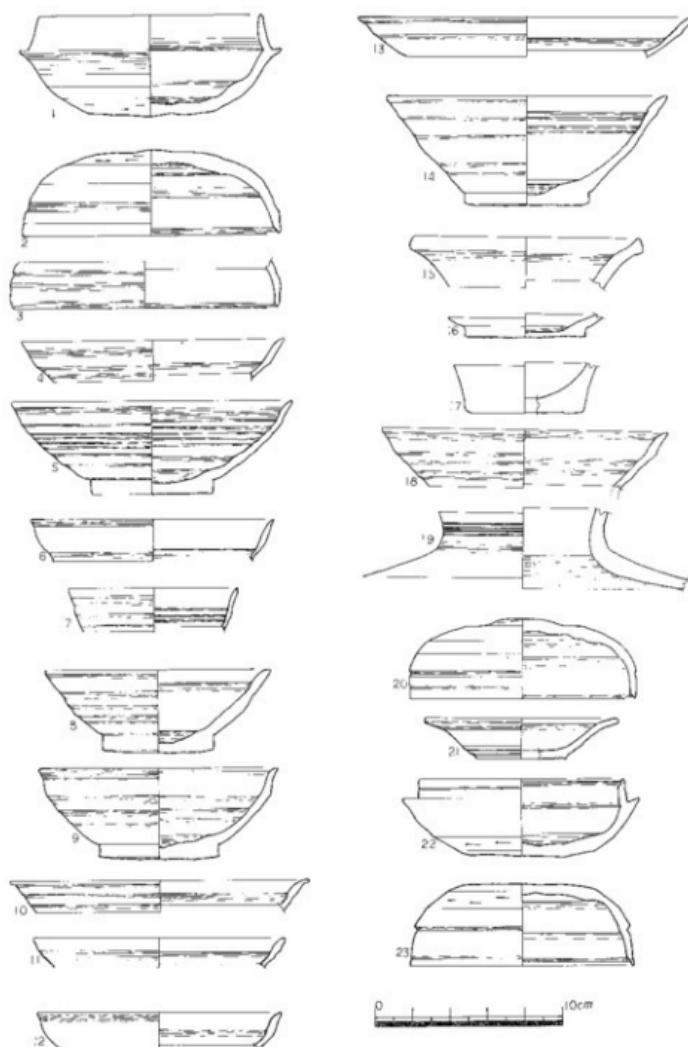
実測不可能分

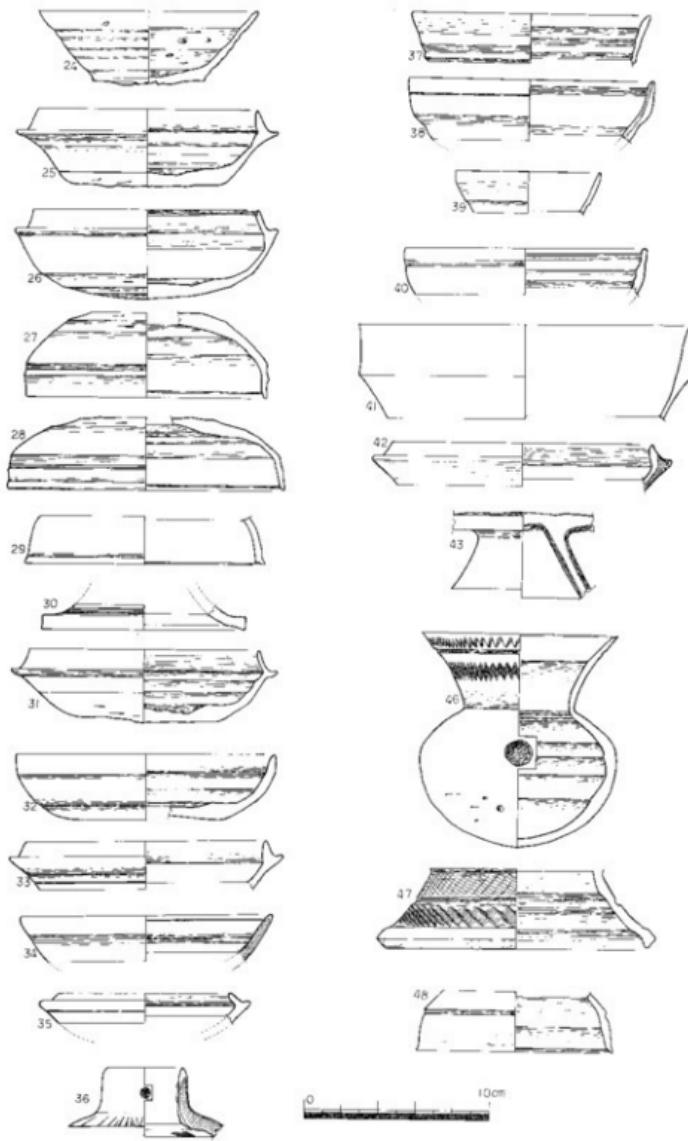
1号墳頂の中により約20点。小さすぎたり部数の関係で実測不可能品。1号墳上作墓葬土中より蓋杯の軸身1点。2号墳作業場土中より
蓋1点(大型)。2号墳作業場土中より実測不可能品12点。(杯、壺、壺、高杯)他に大型蓋2点、横板1点。8号墳(深掘土中より
焼片1点、土師器片3点。10号墳上作墓葬土中より大型1点。14号墳盛土中より土師器底1点。7号墳西北25m地点にて土師器
蓋片2点査定。合計45点実測不可能分。芳賀にて登載す。

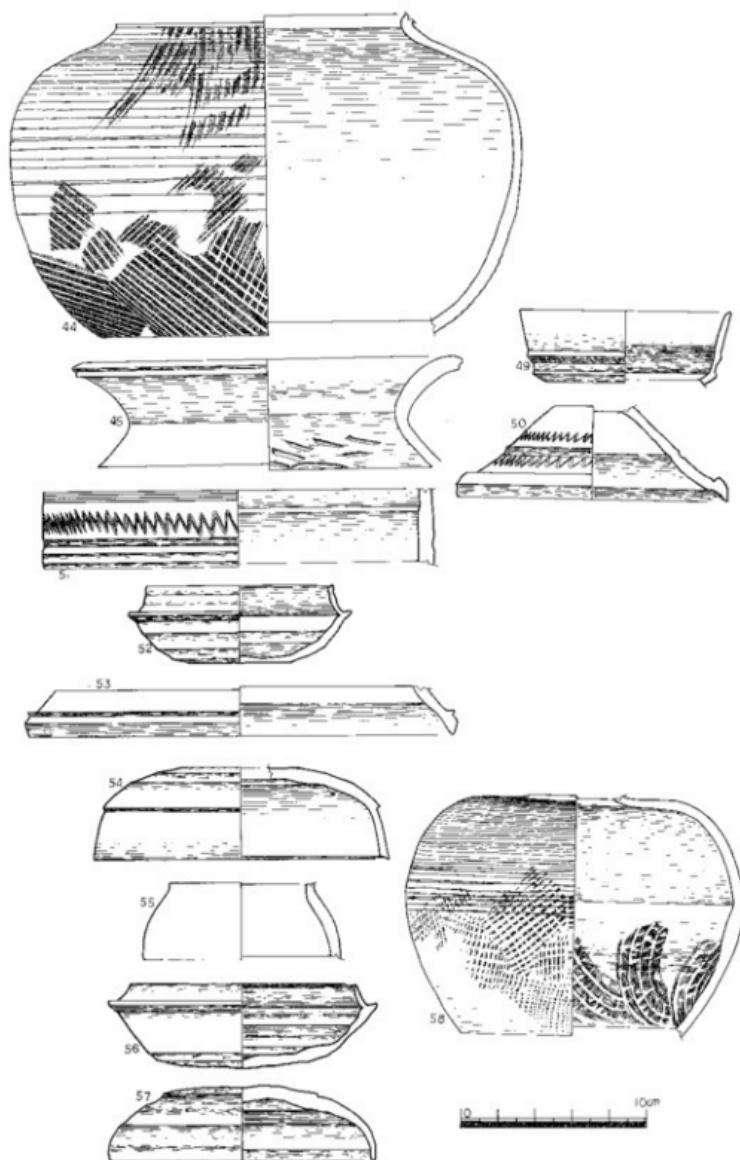
鉄器 (鉄1) 7号墳C石棺内出土。先端より6.8cmにて折れ、先端部分残。折れ口幅1.5cm、厚さ6mm。
(鉄2) 11号墳石棺内より出土。先端5mm位欠いて2.6cmで折れている。折れ口幅1.8cm、厚さ8mm。

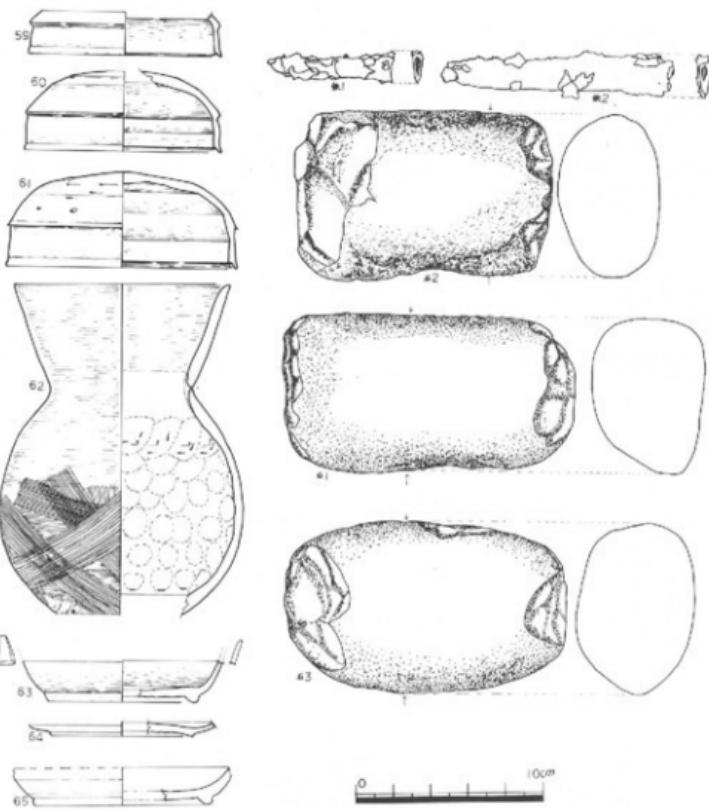
石器? (石3) 2号墳東縁上査探。
(石1) 7号墳上作墓葬土中より。
(石2) 7号墳上作墓葬土中より。

2. 出土遺物実測図







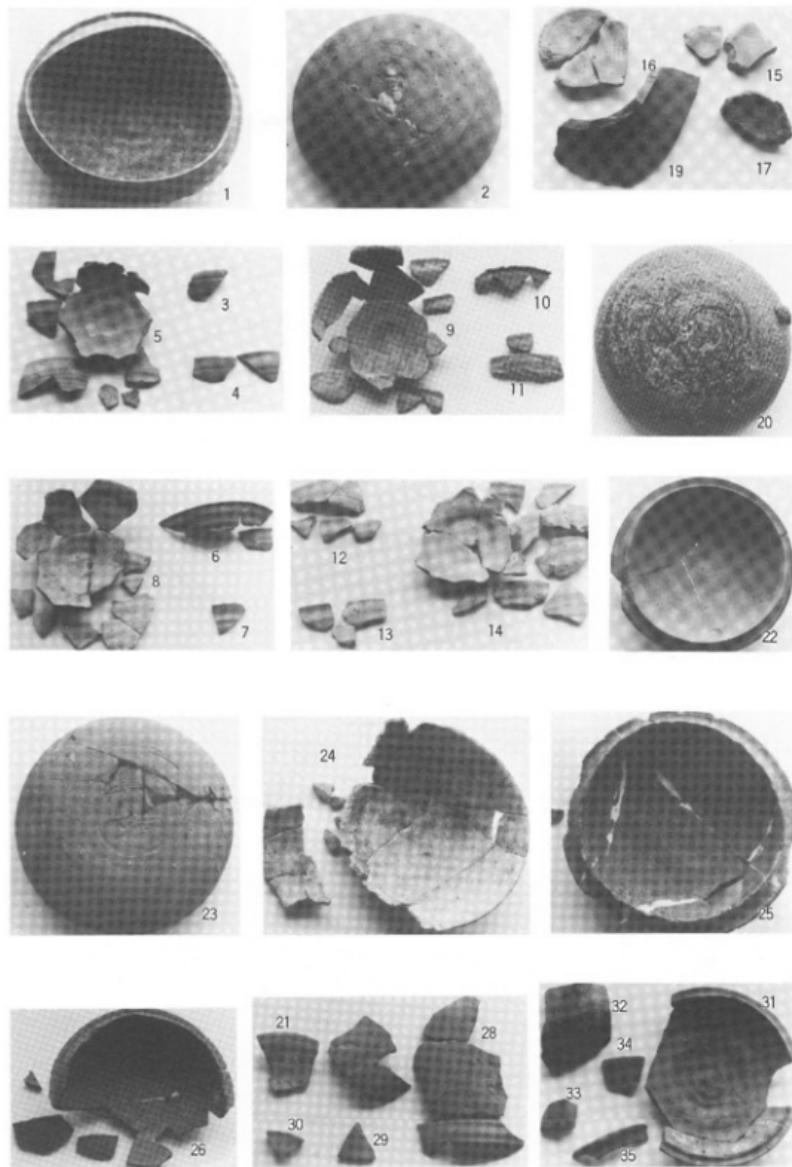


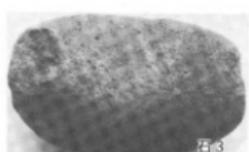
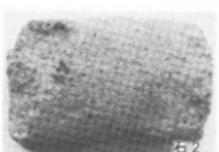
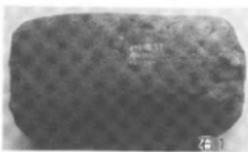
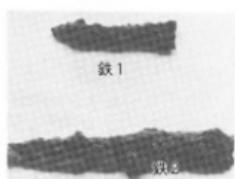
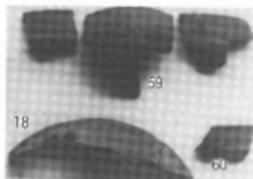
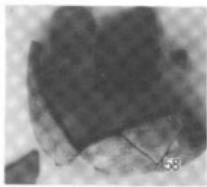
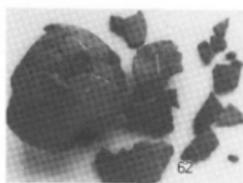
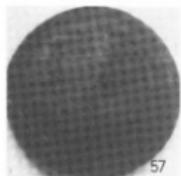
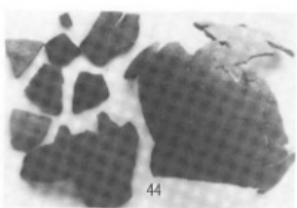
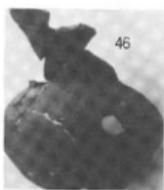
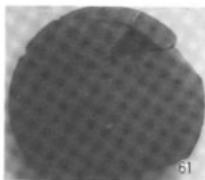
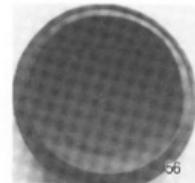
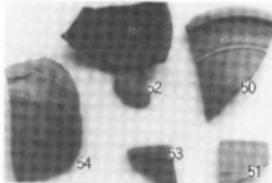
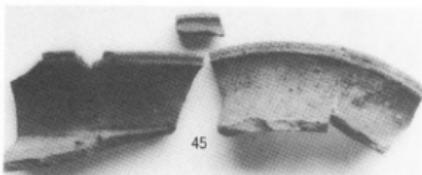
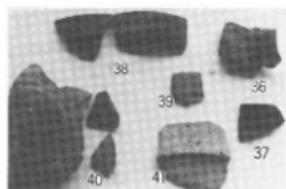
写51. 12号墳 石棺脇より(62)

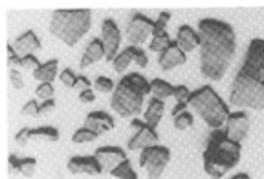


写52. 12号墳 東側溝上(石3)

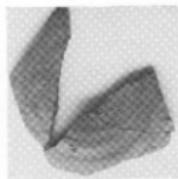
3. 出土遺物写真



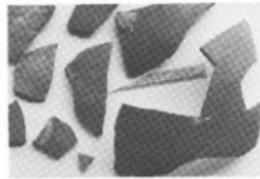




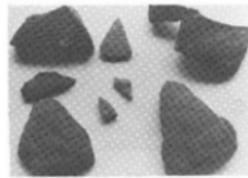
(1) 1号填溝の中より出土
(実測不可能分)



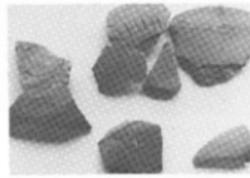
(2) 1号填溝上作業排土中
より(杯底部) 2号填内
至3号填に割落された
ものと思われる。



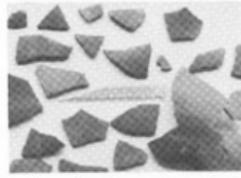
(3) 2号填上作業排土中より(壺)
3号填埋のものと思われる。



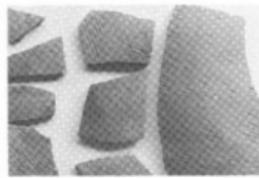
(4) 7号填上作業排土中より
(実測不可能分)



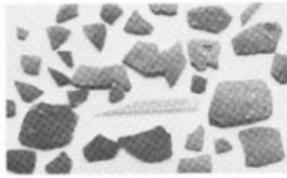
(5) 7号填上作業排土中より
(実測不可能分)



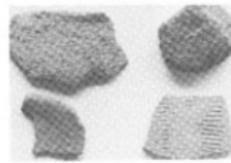
(6) 7号填上作業排土中より(壺)
7号填埋のものと思われる。



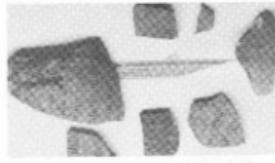
(7) 7号填上作業排土中より(横瓶)
7号填埋のものと思われる。



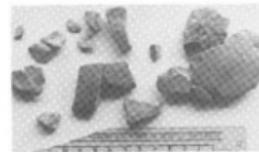
(8) 7号填上作業排土中より(壺)
7号填埋のものと思われる。



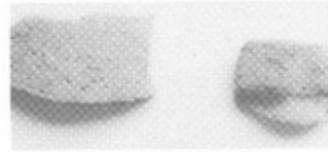
(9) 8号填上腐植土中より
(実測不可能分)



(10) 10号填上作業排土中より(壺)
10号填埋のものと思われる。



(11) 14号填盛土中より
(土師器の壺片と思われる)



(12) 7号填西北25m地点表探
(土師器の壺片)

ま と め

今回の調査対象となったのは、11号墳、12号墳、13号墳、14号墳、及び15号墳の計5基の墳丘であったが、調査前現地踏査の段階で他に10基の墳丘が存在していたらしいことを知り、急拠調査対象に加えられる事となった。本来5基の調査期間しか取られていなかっただけに、調査期間は墳丘の数に比して短いものであった。

もともと統合小学校建設用地として購入した段階では、古墳の存在が知られておらず、開校期日を定めて、用地の整備に入ろうとする矢先に5基の墳丘を知り、調査期間を定めたものの、更に10基が調査対象となったとはいえ、開校期日が決まっているため、調査期間を2倍・3倍にのばす事は不可能であった。

調査前現地踏査で新たに調査対象となった1号墳から10号墳までの内、なんら手を加えずに調査に入る墳丘は6号墳のみで、他は墳丘上に盛り上げられた作業排土の除去作業から取りかからねばならず、作業量は倍加されていた。しかし、後で全体の作業量から考えあわせてみると破壊されている度合いが大きいだけに、大まかな作業が多く、精査に費やす作業時間は少なくてすんだようだが、現場で常に作業状況を見つめている調査員は1名、期間が短いために作業に従事する作業員の数は多く、常に数ヵ所に分散して作業を行った。

調査回数、調査員数、作業従事者数の不均衡を是正する作業内容にするため、全墳丘とも同一調査方法を講ずることとした。条件が多少異なっていても、方法及び手順に変化がなければ、作業従事者の個々が作業内容を自覚し、熟知するようになり、それと同時に作業速度もスピードアップされてくると考えたからである。

作業方法は、まず道路を造成するために動かされた作業排土を除去し、元の墳丘状態の実測図を作製、その後、中央部を慎重に掘ることとした。でき得る限り早く埋葬施設を探査するため、50cmから60cm幅の十字型トレンチを入れる。この段階で埋葬施設が判明すれば、その調査、実測を行い、30cm幅ベルトをトレンチに付随させ残して表土を剥ぐ。溝部まで露出させたところで、トレンチ壁面の岡面化及び墳丘部の岡化、引き続き30cm幅ベルトを残して墳丘全体をけずるように掘り下げ、変化を調査、地山まで掘り下げたところで調査を一応終了したものとした。

上記の方法、手順を全墳丘に応用し、墳丘及び溝部の規模、埋葬施設、副葬品、隣接墳丘の築造時期の前後を調べた。以上四点に重点を置いたが、各墳丘にはそれぞれの特徴があり、調査方法も一定であってはならないのであるが、調査員一名が、作業従事者5名から約30名にかけての作業に、眼を光らせなければならなかった当時の苦肉の策といえる。

8号墳上の腐植土中より出土した廻片及び10号墳を切り崩し、北側丘陵斜面へ落し込まれた土砂中より採取した蓋杯片は、当古墳群中最も古く6世紀初頭といいはしても、5世紀末まで溯らせてもいいのでは、と思われるぐらいで、6世紀初頭より7世紀半ば頃までに築かれた群集墳といえる。

この群集墳の眼下、現在の稲荷の集落のある辺りを、古くは土師の郷と呼び、土師神社や土師川が流れ、土師一族が居住していた可能性が窺える。群集墳南東1.5kmの農耕地をへだてた山田の丘陵すこには、須恵の窯跡が数多く発見されており、この地方の土師族と称される人達が、8世紀になって須恵造りの技術を学び須恵の窯業に従事したと考える事はできないであろうか。

古墳の築造順位を考えてみると8号墳が最古で、12号墳が2番目、3番目に10号墳、4番目に9号墳内至7号墳が築かれ、6番目に11号墳内至6号墳が続き、8番目に2号墳内至3号墳、10番目に1号墳となり、4号墳及び5号墳は年代の手がかりとなるようなものはない。13号墳と14号墳は盛土中から7世紀中頃と思われる須恵小片が出土しただけで他に手がかりはなく、7世紀半ば過ぎと考えられる。15号墳はなんの手がかりとなるものも発見されなかった。

一応以上を次の表のとおりまとめ示して結びとする。

時 代	順 位	古墳番号	備 考
6世紀初頭	1	8号墳	12号墳と比べて、出土土器年代が揃っている。
6世紀初頭	2	12号墳	
6世紀初頭	3	10号墳	12と10は10号墳溝中12号墳の落土なし。
6世紀中頃	4	7号墳	7と9はどちらが先か判らぬ。
6世紀中頃	4	9号墳	9号墳溝中11号墳よりの落上あり。
6世紀中頃	6	6号墳	6と11はどちらが先か判らぬ。
6世紀中頃	6	11号墳	
6世紀末	8	2号墳	2と3はいずれが先か判らぬ。
6世紀末	8	3号墳	
7世紀初頭	10	1号墳	1と2は溝の切り合いより2号墳が先である。
不 明	(11)	4号墳	不 明
7世紀中頃	12	5号墳	溝中より土器小片出土。
7世紀中頃過ぎ	13	13号墳	13・14共に盛土中より7世紀中頃の須恵小片出土、いずれが先か判らぬ。
7世紀中頃過ぎ	13	14号墳	
不 明	(15)	15号墳	不 明

昭和55年9月発行

稲荷古墳群発掘調査報告書

発行／郡家町教育委員会
鳥取県八頭郡郡家町大字郡家493

TEL (08587) 2-0201

印刷／綜合印刷出版株式会社
鳥取市西町1丁目215
TEL (0857) 23-0031(代)